

263.8

11

中学教育に於ける英語科

048366-000-7

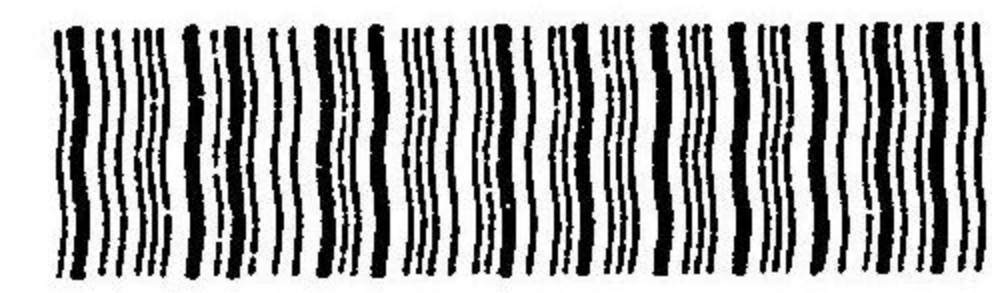
263.8-11

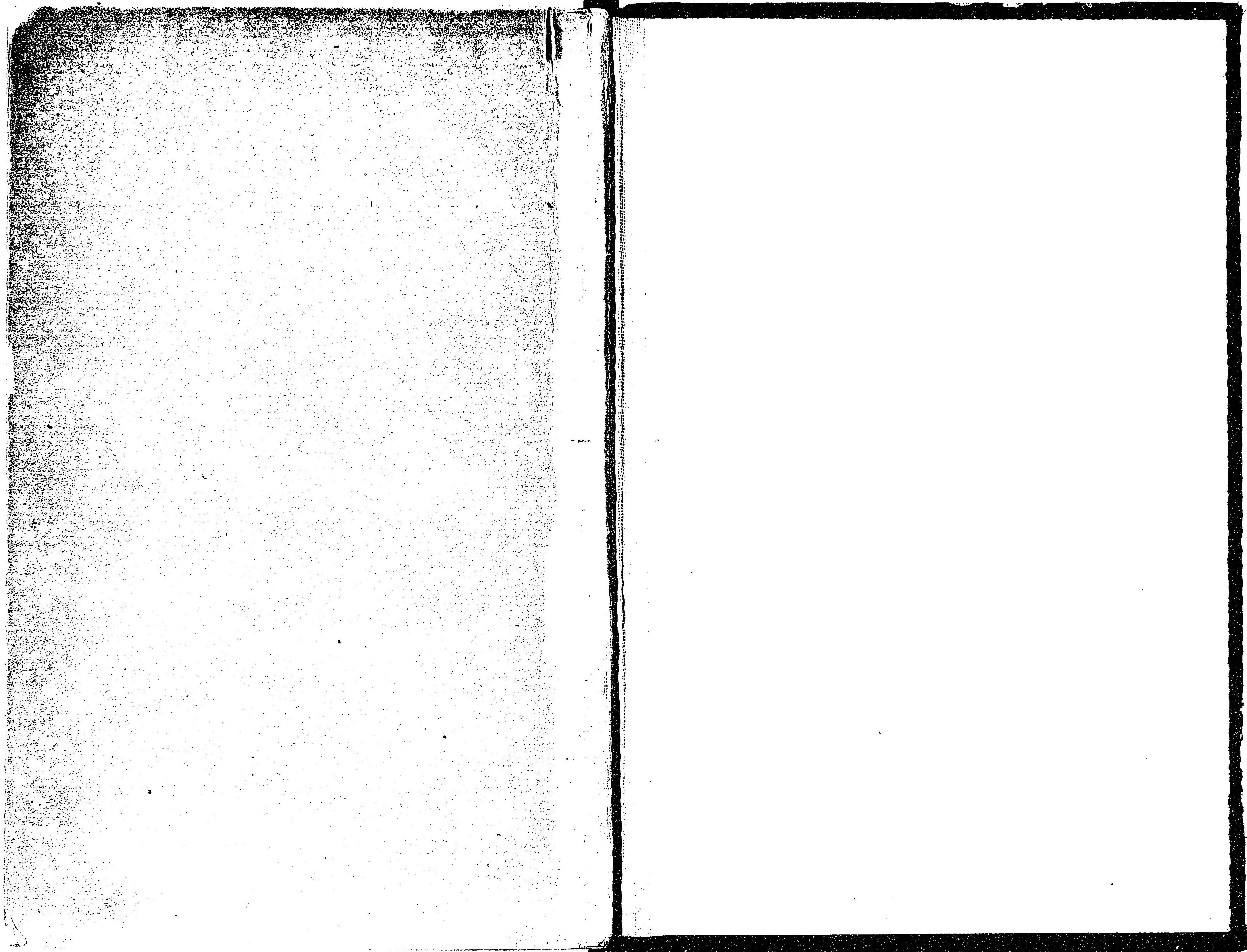
中学教育に於ける英語科

文部省

M35

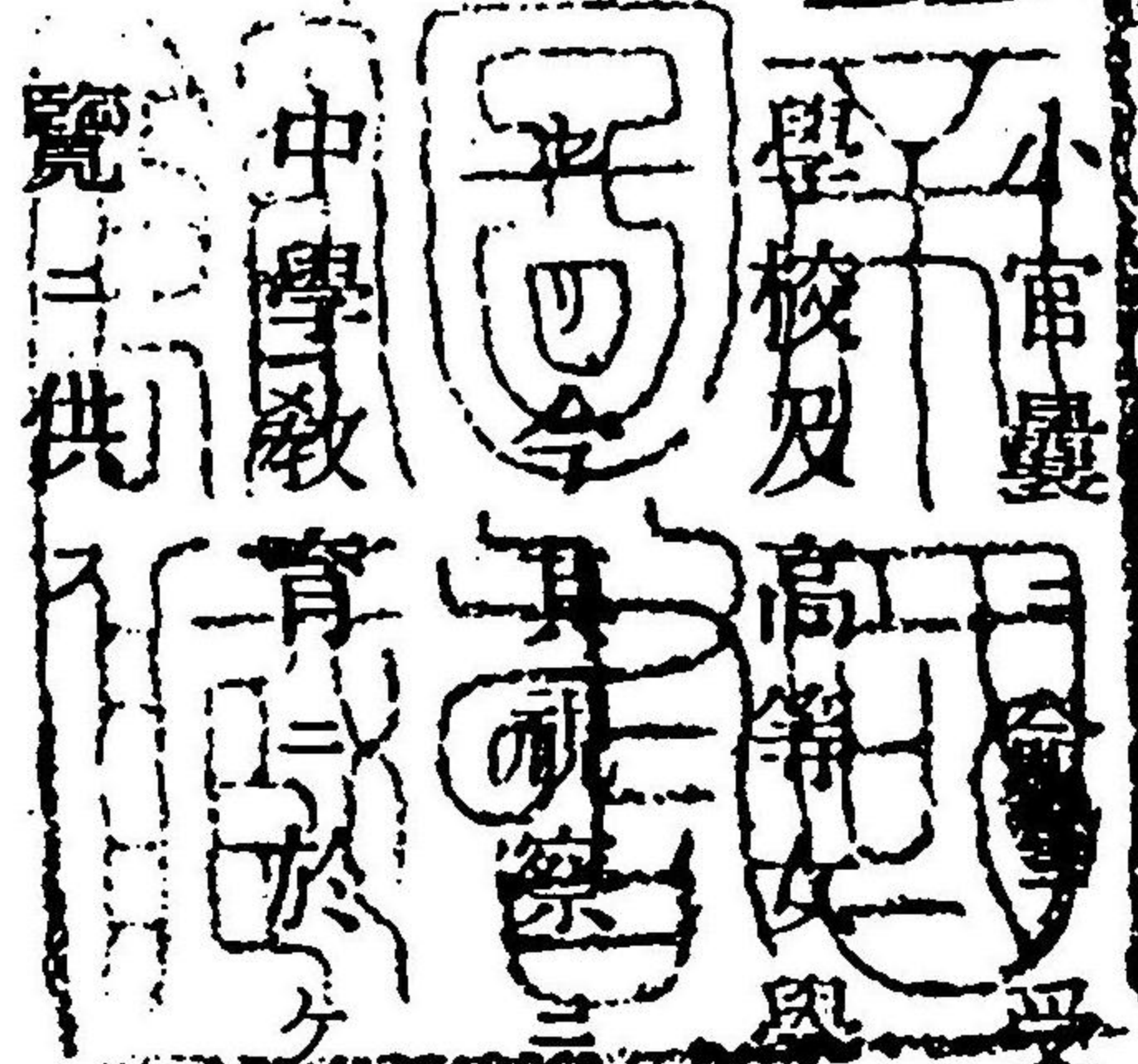
BEF-2426





263.8

11



小官廳ニ受ケテ群馬、栃木、茨城三縣ノ中學校、師範  
 學校及高等女學校ニ於ケル英語科教授ノ狀況ヲ視察  
 依リ感シタル所ト小官カ兼テ有スル  
 中學教育ニ於ケル英語科ニ關スル意見トヲ述ヘテ高  
 覽ニ供ス

明治三十五年二月

高等師範學校教授

岸本能武太



文部大臣理學博士菊池大麓殿

中學教育に於ける英語科の教材教程



抑も現時我國の中學教育に於て英語が如何に重きを爲しつゝありや、又之が爲めに十餘年の中學生が如何に腦漿を絞つゝありやは、先頃發表せられたる「中學校令施行規則」に依りて明白なり、其の改正課程の時間割を見るに實に左の如し。

| 修 身 | 國 語 | 漢 文 | 外 語 | 歴 史 | 地 理 | 數 學 | 博 物 學 | 物 理 學 | 化 學 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|
| 一   | 七   | 七   | 七   | 三   | 三   | 三   | 二     | 〇     |     |
| 一   | 七   | 七   | 七   | 三   | 三   | 三   | 二     | 〇     |     |
| 一   | 七   | 七   | 七   | 三   | 三   | 五   | 二     | 〇     |     |
| 一   | 六   | 六   | 七   | 三   | 三   | 五   | 〇     | 四     |     |
| 一   | 六   | 六   | 六   | 三   | 三   | 四   | 〇     | 四     |     |

中學教育に於ける英語科

|   |    |   |   |   |    |
|---|----|---|---|---|----|
| 法 | 經濟 | 圖 | 唱 | 歌 | 合  |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 計  |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 二八 |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 二八 |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 三〇 |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 三〇 |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 三〇 |
| 一 | 一  | 一 | 一 | 一 | 三〇 |

由是觀之中學課程に於て最多數の時間を有するは外國語にして、第五年を除く外は毎週實に七時間なり。第二は國語漢文にして、全躰を通じ外國語よりも第四年に於て單に每週一時間少きのみ。第三は數學にして、第四を歴史地理と爲す。さらば外國語は實に今日の中學課程に於ては重要科目中の最も重要なるものにして、實に之が爲めには國語漢文合併の科目よりも尙多くの時間は費さるゝなり。外國語の爲めに斯く多くの時間を費すは果して正當なりや否やは別問題として、既に斯く規定しある上は、今日に於て此の七時間が如何なる目的の爲めに費されつゝありや、又此の目的は如何に實際に於て達せられつゝありやを講究するは決して無要の事にあらざるべし。

今日の處に於ては中學生たるものは第五年を除くの外は、必至毎週七時間を外國語の爲めに費さるべからず。さらば中學に於ける外國語研究の目的は如何、中學校令施行規則第四條に曰く

外國語は普通の英語、獨語又佛語を了解し、且つ之を運用するの能を得せしめ、兼ねて智識の増進に資するを以て要旨とす

と、さらば中學に於ける外國語教育の目的は、先づ(一)普通の外國語の了解に在り。次ぎには(二)外國語を運用するに在り。而して兼ねては(三)智識の増進に資するに在り。

斯く云へば中學に於ける外國語教授の目的は明白なるが如し。雖も精しく考ふる時は種々の問題は踵を接して起り來るなり。(一)に曰く、普通の外國語とは果して如何なる程度のものを目指して云ふや。(二)に曰く「普通の外國語を了解すとは果して如何、單に讀書力養成の意義なりや將又筆記の外國語に止まらず口述の外國語をも了解するの意義なりや、(三)に曰く外國語を運用すとは何の意ぞや、能く自由に外國人と談話し且つ文通し得るの意か、了解は單に受動の意にして運用は施動の意

なるか(四)に曰く、智識の増進に資すとは外國語を學ぶ際に於て偶然に  
知得する智識を指すにや、將又學び得たる外國語を利用して泰西の文  
明思想を了解輸入するの意なりや。

此等は自ら胸間に浮び來る問題の重なるものなるが、要するに第四  
條の精神は決して學生は中學に在る間に於て外國語を完全<sup>〇</sup>に習得せ  
ざるべからずと云ふの意にはあらざるべし。單に中學卒業後に於て十  
分に外國語を了解し運用し且つ利用し得るに至る正當なる準備<sup>〇</sup>を爲  
すべしと云ふの意に過ぎざるべし。そは同じく第四條の末項に左の文  
字あればなり。曰く

外國語は發音綴字より始め、簡易なる文章の讀方譯解書取作文を  
授け進みては普通の文章に及ばし、又文法の大要會話及び習字を  
授くべし。

右の如くなれば中學に於ける英語科の目的は、決して學生をして實際  
外國語にて書かれたる普通の書物を自由自在に且つ讀み且つ味ひ得  
しむべしと云ふに在らず、又外國人に對して遺憾なく言を交へ文を通

じ得しむべしと云ふにもあらず。只將來高等學校に於て専門學校に  
於て、又大學校に於て此等の目的を到達するに遺憾なき準備を爲さし  
めんと欲するのみ。そは今日の處如何なる中學校に於ても、今日の如く  
他に負擔の多く又劇しき中學生に取りては、一週七時間の授業により  
て斯くの如き目的に達せんことは到底思ひもよらざる事なればなり。  
さらば問題は我國今日の中學制度に於ける外國語の理想<sup>〇</sup>は如何てふ  
となるべし。即ち外國語を如何なる程度迄且つ教へ且つ學び得れば、そ  
れにて中學に於ける外國語教授の目的は達せられたりと斷すべきや  
是れなり。予を以て之を見れば此問題に明確なる解釋を與ふるは、中學  
に於ける外國語教授の目的を達せん爲め、否、中學教育全脈の發達成功  
の爲め、今日に於ける最大急務なりと信ず。中學教育に於ける外國語の  
教授法を説くものは世間時に之れあり。然れどもそれよりも尙根本問  
題たる如何なるもの<sup>〇</sup>を何の位教ふべきか<sup>〇</sup>の教材並びに教程問題に  
つきて論ずるもの、少きは實に憾むべき事ならずや。

中學教育に於ける外國語教授の理想は如何。如何なる書物を如何なる

程度迄教ゆれば、それにて中學校に於ける外國語教授の目的は達せられたりと云ふべきか。此の理想明白ならず此の標準確定せずんば中學校の校長に於ても又其の英語教師に於ても、己れの職責上大に迷惑するところあるべく、又文部當局者に於ても、全國各地の中學生の外國語に於ける學力の統一上、大に困難を感ずるところあるべし。

理想を定むるの必要は、當に外國語に於て然るのみならず、他の凡ての科目に於ても然り。然れども他の科目に於ては其の必要外國語に於けるが如く甚だしからず。たとへば重要科目の一なる數學に於ては、名は即ち一の數學なれども實は算術代數幾何等の科目に分れ居り、且つ各科に於ても略ぼ何より何までと定まり居るが故に、餘りの困難なし同じく重要科目の一なる歴史地理に於ても亦然り。或は萬國と云ひ或は東洋と云ひ或は日本と云ひ、範圍頗る廣ければ、此等を如何なる程度に教ゆべきやは随分困難なる問題なるべし。雖も、全体に時間の少きと科目の自ら小別され居ることによりて、此の困難は外國語の如く甚だしからず。之に反して國語漢文に至りては前二者に優りて困難大なりと

云はざるべからず。然るに今日に至りては逐々に國語讀本も漢文讀本も共に秩序的にして満足なるもの出で來らんとし、且つ國語と漢文とを合併して可成同一教師をして兼ね教へしめんとする傾向あるは、實に賀すべき事なり。然れども全躰國語及び漢文は如何なる種類の材料を如何なる程度迄に授くべきものなるか、又之を教ふる方法は如何、此等は國語漢文科に取りては今日に於て最も至急に研究せらるべき問題なりとす。そは國語漢文の時間數は外國語に次ぎて最も多ければなり、又國語漢文の教師と教授法とは最も不完全なればなり。

されども國語漢文科に於て總時數の半分は國語に半分は漢文に費さるべきものなれば、自ら二科目に分るゝ姿にて、外國語の凡て一科目なるの比にあらず。外國語に至りては則ち然らず。七時間は七時間凡て外國語の爲めに費さるべきものなり。發音と云ひ、綴字と云ひ、讀方と云ひ、譯解と云ひ、文法と云ひ、作文と云ひ、會話と云ひ、習字と云ひ、書取と云ふは、決して國語と漢文と云ふが如く、又歴史と地理と云ふが如く、別々の科目と見るべき性質のものにあらず。此等は必ず同時に總合して學ば

ざるべからざるものにして、決して分離すべく前後にすべきものにあらず。此等は云はゞ凡て一中心に向つて運轉すべきものにして、凡ての目的は悉く外國語の了解と活用とに外ならず。さらば發音、綴字、讀方、譯解等の此等の條目は、如何なる割合に於て教ゆべきものなりや、又此等を教ゆるには如何なる材料を如何なる程度迄如何なる方法によりて教ゆべきや、即ち中學に於ける外國語教授の理想如何。今日に於て中學に於ける外國語教育の最大缺點は實に此の理想の缺乏に在るにあらずや。外國語の爲めに多くの時間と勞力を費す割合に成績の良好ならずして進歩の遅々たるは、實に此の理想の缺乏に因るにあらずや。全体今日我國の教育の缺點は統一の缺乏に在りて存す。統一の缺乏は種々の點に於て之を發見し得べしと雖も、他は措き最も手近き中學教育に就いて目醒しき例證を擧げん。曰く中學に於いて國語の授業と英語の授業との間に統一の絶無なると是れなり。乞ふ試みに所謂英語の直譯なるものを見よ。此内果して國語なりや、漢文なりや、將又英語なりや。國語の教授は有害なるもの蓋し直譯的日本語より甚だしきはあらず。

ざるべし。然り而して中學の十中八九は、今日も尙直譯を教ゆるにあらずや。一方に於て國語を教ゆるは何の爲めぞ。正確にして而も明白なる國語を教ゆるが爲めにあらずや。然るに一方に於て此の目的を有する國語を教へながら、一方には支離滅裂なる直譯を許す。是れ恰も水を注ぎつゝ火の燃ゆることを望むと何ぞ撰ばん。一統の缺乏も亦甚だしからずや。故に予は此點に於て殊に速かに適當なる方法の設けられて、此の矛盾の調和せられんことを切望す。國語の教師と外國語の教師は最も接近せざるべからざるもの否。將來に於ては外國語の教師たらんものは必ず能く國語の教師たり得るものならざるべからず。然るに事實は全く此反對にして、偶々英國の教師が國語の事を語り、國語の教師が英語の事を説けば、學生は奇異の思ひを爲すなり。否、教師のれ門違ひを笑ふなり。而して斯く感ずる者は決して單に學生のみにあらず。

統一の缺乏には其他多くの例證ありと雖も、我國現時の中等教育に於ける英語は實に無統一中の無統一なるものなるべし。中學の英語と高等學校の英語との間に連絡なきのみならず、一縣の中學と他縣の中學



との間に連絡なきなり否、單に一縣の諸中學の間に連絡なきのみならず、一中學の各級の間は又各教師の間に連絡なきなり否々單に之のみならず、一級の英語を數人の教師が分擔する場合に於て此等數人の教師の間に連絡なきなり否、一級の英語を悉く一人の教師が受持つとして、此一人の教ゆる讀方と解釋との間に又文法と會話との間に連絡なきなり。是に於て乎、一級の英語は他級の英語と異り一校の英語は他校の英語と同じからず、此の教師は英語は彼の教師の英語と衝突し、譯解に於て學びし英語は文典に於て學びし英語と齟齬す。是れ要するに教師間に統一なく學校間に連絡なきに原由するものにわらずや。

英語教育の統一は何故に今日の急務なる乎。予を以て之を見れば、今日の如く英語の爲めに教師も學生も共に多くの時間と能力とを費しながら、満足なる結果を得る能はざるは職として英語教育に於ける統一の缺乏に原由せずんばわらず。乞ふ吾人をして英語教育に於ける統一の缺乏が果して如何なる事を意味するやを研究せしめよ。

試みに思へ、今日に於て中學生が毎週英語の爲めに七時間を費すとす

れば、一學年に費す處は二百數十時間、五年間に費す處は實に一千有餘時間なり。而して此の一千有餘時間の幾分が能く正當に有益に費されて其幾分は無益に否有害に浪費せられつゝあるや、而して此の時間と又時間よりも尙ほ大分なる能力との浪費と損害とは如何にして生じ來るやと云へば、一には教師間に統一なき爲め甲の教ゆる事と乙の教ゆる事との間に生ずる無益なる重複及び有害なる矛盾より來り、又一には讀方、譯解、文典、作文、會話等の教授法の調和せざる爲め、能力は個々不要の點に、浪費せられて、全躰の爲め統一的に利用せられざるより來るにわらずや。試みに第一年にて學びし發音が變則にして、第二年にて學ぶ正則の發音と矛盾すと假定せよ、第二年の正則なる發音を覺えんには、先づ第一年にて學び得し變則なる發音を忘れて、而して後に始めて、第二年の發音を覺えざるべからず。云ひ換ふれば、第一年に於て何も發音を學ばざりし方、第二年に於ける進歩は返つて速かなる道理なり。又試みに甲教師の譯解法が誤譯若しくは、狂譯の名ある直譯なりと假定せよ。此の教師より直譯の惡習慣を習ひ得たる學生は正則なる譯讀

を學ぶに當りて、常に非常なる損害を蒙り時間と能力とを浪費するのみならず、遂に正常なる譯解法を會得する能はずして一生不完全なる英語に満足せざるべからざるに至る。是れ豈に單に時間と能力との問題のみならんや。

英語を完全に學ばんとするものは須らく(一)發音(二)綴字(三)アクセント、(四)讀方(五)譯讀(六)文法(七)作文(八)會話(九)書取(十)習字等を學ばざるべからず。而して此等の條目は如何なる順序に於て、如何なる割合に於て、如何なる程度に迄、又如何なる方法によりて教へられべきものなるやは實に今日の大問題なるべし。此等が適當なる順序と割合に於て調和的に教へらるゝと否とは、學生の進歩上、英語教育の成功上、我國文化の消長上、實に偉大なる影響を有するなり。若し此等にして整然たる系統に従ひ組織的に教へられんか、學生は時間と能力とを浪費せずして英語に上達し得ん。然るに今日の處に於ては、英語は學生に取りては單に苦しさのものゝ如く、又教師に取りては遂に面白く教ゆると能はざるものなるが如きの觀あり。是れ要するに教授法の適當ならざるが爲めのみ若

し正常なる方法によりて教授せられんか、英語は決して面白く教ゆると能はざるものにわらず、又學ぶに樂しからざるものにわらず。或種の人々には爲らく、日本人は遂に英語に上達し得べき見込みなしと、何ぞ斷定の速かにして且つ失望の甚たしきや。英語豈に日本人に取りて絶望的の言語ならんや。要は唯之を學ぶ適當なる方法の發見にあるのみ。今日の英語教授法には統一なし。否、今日迄の處に於ては我國の英語教育にて曾て一定の教授法ありしとなし。教師は各自勝手なる事を勝手に教ゆるが故に、重複すると屢々之れあり、之が爲め時間と能力とは浪費せらるゝなり。又矛盾すると屢々之れあり。而して矛盾は常に發音に於てのみならず、譯讀に於てのみならず、文法に於てのみならず、殆んど凡ての條目に於て然り。故に學生たるものは何れの説を信すべきか、何れの教師に従ふべきかを知らず。殆んど五里霧中に彷徨するもの比々皆然り。斯くの如くして奚んぞ英語教育の成功を望むべけんや。統一なくして英語の諸方面を教授するは、恰も連絡なき烏合の軍隊が四方八方より時を定めずバラバラに城を攻むるが如し。攻者に於て時

間と努力とを浪費するとの非常なるにも關らず、所謂勞して功なく、遂に城を攻め落すと能はざるに終るべし。之に反して英語を統一的に教授するは、恰も諸軍隊が部署を定め作戰計畫を整へ、各々時と所とを得、全力を盡して一時に攻撃するが如し。此の如くにして遂に抜けざる城は蓋し稀なるべし。

今日の處全躰に於て我國の中學教育が思ふ様に成功せざるには種々の原因あるべし。雖も重要科目中の重要科目なる英語の教授法宜しきを得ずして之が爲めに學生をして法外なる時間と能力とを浪費せしむるもの、これが一大原因たらずんばあるべからず。學生は毎週七時間教室に於て英語の授業を受けざるべからず。而して之に對しては毎日相當の豫習と復習とを爲さざるべからず。故に英語の授業が統一的ならず秩序的ならざるに於ては、一人の學生が蒙る時間と能力との損害は果して如何ぞや。而して此の如き損害を蒙るもの、決して一人の學生にわらず、現に十餘萬の中學中<sup>生</sup>は殆んど皆此くの如き損害を蒙りつゝあるなり。宜べなり、中學教育の振はざるや。然り而して中學生の蒙る損

害は我國の蒙る損害に外ならず、又中學教育の振はざるは正さに我國文化の消長に大關係を有するものなり。そは之に反して英語が理想的に教授せられ、從つて中學生が英語に於て多くの時間と能力とを節儉し得れば、此等の時間と能力とは其上の英語若しくは他の科目に向つて流用し得らるべければなり。世の教育家たるもの、豈に對岸の火災視して可ならんや。

さらば中學教育に於ける英語の理想は如何。如何なる程度の英語を如何に讀み且つ書き得れば、中學生の英語はそれにて最高度即ち理想に達したりと云ふべきや。是れ甚だ漠然たる問にして、固より明確なる答を與へ難し。雖も、何人か遂に之か答をなさざるべからず。故にたとへ明確なる答を與へ難しとするも、予は中學教育に於ける英語の最高度即ち理想につき大躰の範圍を示すと、強ち困難なりと思惟せず。即ち予が以て中學に於ける英語の理想と考ふるものは左の如し。曰く

中學卒業生にして、若しナショナル第五讀本若しくはユーニオン第四讀本程度の英書を英米人に意味の明白に了解し得らるゝ様

音讀し得れば彼は中學に於ける英語の理想に到達したる者なりと斯く云へば一見甚だ容易なるが如く思ふ人あるべし。故に予は今少しく予の思想を明白にせざるべからず。

(一)我國の英學者輒もすれば讀本を輕蔑して小供らしとなし、中學に於てすらも之を教ゆるを好まず。然れども概して讀本は中學の教科書として最も適當なるものなり。著者と題目と共に常に變化するが故に、用語も文脈も共に單調ならず。之が爲め一方に偏僻なる發達を避け得ると共に、又一方には學生の倦怠を避け得るの利あり。而して予が特にナショナル第五讀本とキニオン第四讀本を選次たるは、兩書が諸種の英語讀本中最も榮く一般に知れ居ると、此等の比較的容易なる此等の二書を眞に能く譯讀し得る人には英語にて書ける殆んど凡ての書物は之を了解するに大なる困難なかるべきとを信すればなり。實に此等の讀本は實は名文の詩文集に外ならざるなり。

(二)或る人は思はん、此等の讀本を音讀するは實に容易の事なりと、然れども予は單に音讀とは云はず、音讀の上に、英米人に意味の可成り明白

に了解し得らるゝ様てふ條件を附したり。自己流に變則的に即ち聽者に意味の分らざる様に音讀するは、甚だ容易なるとなるべし。否、此くの如きは其實音讀にあらず。そは讀むにはあらざればなり。音讀する事が單に他人に分らざるのみならず、自己にも亦分らざるべければなり。英米人が聞きて明白に意味を了解し得る様に音讀するは、決して容易の事にあらず。

(三)予は單に音讀すと云ひて譯讀の事を云はず。故に或る人は問はん、未だ曾て此等の讀本を譯讀したるとなくして頓かに之を音讀するの意かど。予は答へて云はん、始めて讀む書物を單に音讀したるのみにて、意味を解せんは、餘程六つかしき事なれば、予は必ずしも斯くまでを望まず。既に譯讀したる書物を聽者に意味の分る様に音讀し得れば可なりと思ふ。然れども聽者に分る様に音讀し得んは、既に譯讀したる書物に於ても決して容易ならず。そは斯くなし得んには、音讀者は今音讀しつゝある事の意味を了解せざるべからず。誰か自ら了解し得ざる事を如何で他人の明白に了解し得る様に音讀し得べけんや。

右の如くなるが故に此等の讀本を英米人に可成り明白に分る様に音讀するは一見して思ふが如く容易の事にあらず。故に予は中學に於ては學生が卒業する迄に、此れ丈の事さへ出來れば、それにて満足なりと思ふ。

是に於て乎成る人は云はん、今日は一般に所謂實用英語(Practical English)の流行する時にして、會話作文の全盛なる時代なり。然るに汝は此の流行の實用英語を忘却したるが如しと。予は答へて云はん、否、予は決して實用英語を忘却せず、予が實用英語に關して殊更らに何事をも云はざるには、二つの理由あり。

第一の理由は、予は今日全盛なるが如き實用英語を以て一時の流行物と觀じ、早晚今日の如く珍重せられざるに至るを信ずると、是れなり。今日に於て、實用英語の流行するは主として條約改正の當時に於て内地雜居盛んに行はれ、英語を用ゆる外國人の多く我國に入り來らんと、想像一般に行はれ、誰も彼も外國人と會話を爲し文通を爲すの必要あらんと思はれしに基くものならん。然れども此は是れ一種の妄想のみ

迷信のみ。入來する外國人の數は年々増加するに相違なし。然れども其數固より限りあり。中學に在る十餘萬の學生豈に悉く單に此等の外國人と談話し文通するが爲めに英語を學ぶ者ならんや。中學の英語豈に單に所謂實用の爲めのみものならんや。中學の目的豈に單に通辯を造り書記を造るが爲めならんや。實用英語固より惡しきものにあらず。中學生たる者須らく之に熟達せざるべからず。然れども此は決して中學に於ける英語教育の最大なる目的にもあらず。又理想にもあらざるなり。

第二の理由は、所謂實用英語なるものは或る程度に於ては、予の所謂中學に於ける英語の理想中に含有せられつゝありと云ふと、是れなり。全く會話の出來ず又文章の綴れざるもの、奚んぞナショナル第五讀本若しくはユニオン第四讀本を英米人の明白に意味を解する様に音讀し得んや。之を爲し得るに至らんには、必らずや大に會話を稽古せざるべからず。又作文を勉強せざるべからず。故に予の所謂理想の中には此等は相當なる程度に於て、即ち此の理想を實現するに必要な限りに

於て十分に含有せられつゝあるなり。然るを此等即ち會話作文を以て中學英語の本牀なるが如く考へ、英書を讀下して直ちに意味を了解し以て智識の増進に資すてふ大切なる目的を忘却せんとするは、實に主客を轉倒したる議論にならずや。談話文通は時々、事にして、而も予の所謂理想に達せるもの、餘り困難を感せずして爲し得る處なるべし。然れども英書の正則的讀書力、即ち單に讀下して普通なる英書の意味を解して遺憾なきに至るは、所謂實用英語よりも遙かに困難にして且つ大切なる事なりとす。

論じて茲に至れば勢ひ予が所謂中學に於ける英語の理想に就き、其の内容及び之に到達する方法等に就き、今少しく精密に説明するの必要ありと思はる。

ナショナル第五讀本、若しくはユニオン第四讀本程度の英書を英米人に可成り意味の明白に分る様に音讀すると云ふ事は、甚だ單簡なる事の如くして其實決して然らず。中學卒業の際に於て此の目的を十分に達せんには、毎週七時間の英語の時間は五年間を通じて最も有益に

利用せられざるべからず。今日の如き教授法にては到底此の目的を達し得べしとは思はれざるなり。且つ此の目的を達せんが爲めには、英語教育に關して前に擧げたる凡ての條目は、一々適當なる順序と割合とに於て満足せしめられざるべからず。即ち(一)發音(二)綴字(三)アクセント(四)讀方(五)譯讀(六)文法(七)作文(八)會話(九)習字(十)書取等は第一年より第五年の終りに至る迄系統的に總合的に教授せられざるべからず。

殊に吾人が常に記憶せざるべからざるは、吾人は日本人として外國語なる英語を且つ學び且つ教ふてふ一事なり。日本人なる吾人が外國語なる英語を且つ學び且つ教ふるに當りては、殊に日本人なるが故に困難なる事多きを記憶せざるべからず。而して細かに云へば此の困難に二種あり。第一種は吾人は日本人なるが故に、英語に關し日本人にあらざれば感ぜざる多くの困難を感ずると是れなり。第二種は今日迄英語を學べる先輩が吾人に遺せし變則讀み直譯等の凡ての惡習慣是れなり。後者は云はゞ人爲の妨害物にして前者は自然の妨害物なり。吾人は英語を學ぶに當りては必ずや此等二種の妨害物を超越せざるべからず。

らず、殊に他人に英語を教ゆる者に取りては、責任更らに重大なりとす。即ち彼等は先づ自ら此等凡ての困難と妨害との何物たるを熟知せざるべからず。否、此等に打ち勝ちたる経験即ち手覚えなかるべからず。加之如何にせば能く學ぶ者をして此等に打ち勝ち得しむるやに就き、最も簡便なる方法に通曉せざるべからず。然らずんば、遂に英語教師たるの職責を全うするに能はざるべし。

要するに吾人日本人は英語を學ぶに當りては常に二種の病氣に冒され易き事、否、常に冒されつゝあるとを熟知せざるべからず。第一種は自<sup>然</sup>的<sup>的</sup>病氣にして日本人たるが故に先天的に來るもの、第二種は人<sup>爲</sup>的<sup>的</sup>病氣にして先輩の遺傳より來るものなり。故に苟も英語を日本人に教へんと欲するものは、己れが言語上の醫者なるとを記憶せざるべからず。既に醫者たる以上は能く日本人にして英語を學ぶ者の最も羅り易き病氣を之が療法とに通せざるべからず。若し此の準備なく資格なくして人を教へんか、奮に勞多くして功少きの歎あるのみならず、人を癒さんとして返つて人を害するの譏あらん。是れ實に日本人の教育に經

験なき新來の外國教師が思ひの外に成功せざる所以にあらずや。外國人たり日本人たるに論なく、苟も日本人に英語を教へんとするものは必ず予の所謂醫療的教授法に依らざるべからず。是れ即ち最も實際的にして而かも成功的なればなり。

日本人は英語を學ぶに當り實際如何なる病氣に罹り易きや、又如何なる療法が最も効驗ありや、は頗る大問題にして、今茲に之を詳論し得ず。と雖も、假りに予の考案の一斑を擧げん。是れ斯くせば前に云へる中學教育に於ける英語の理想を實現し得べしとの確信が、決して單に架空の議論にあらずして、實際の經驗に基くものなることを示さんが爲めのみ、予は既に中學に於ける英語の理想を説きたり。故に今は進んで如何にせば此の理想を實現し得るやに説き及ばざる可らず。即ち英語の教授法に關する予の意見を述べざるべからず。されども予が今より云はんとする處は、單に予の考案の一斑のみ、詳細は之を他日に譲らざるを得ず。

(一) 發音

全肺發音と云ふ文字は其意義甚だ漠然として決して明白ならず。されども予は便宜の爲めに Letters 即ち字母の發音と Words 即ち語の發音との區別を爲し、語の發音をば綴字及びアクセントの條に譲り、茲には單に字母の發音にのみ就いて云はん。さて字母の發音に就いて吾人日本人が最も超越し難しとする困難又最も羅り易しとする病氣は如何と尋ねるに、其例甚だ少からず。試みに母音と子音の中に就き最も甚だしきもの二三を例として擧ぐれば左の如し

先づ母音。即ち Vowels の發音に就いて最も屢々起るもの、從つて最も明白に區別すべくして而かも區別に最も困難なるものを云へば、

- (一) a と æ の區別。例、as と ass との如し。吾人の多數は此の二者の區別を知らず、若し知るも實際に之を爲さざるなり。and, hand, at, hat, as, has 等の a は悉く æ にして a にあらず。然るに日本語に a 音はあるも æ 音なきが爲めに、特別に注意して之が發音法を教ゆるにあらざれば、遂に此の區別を爲す能はずして止むなり。
- (二) o (即ち a) と o の區別。例、oa と oo との如し。元來 o 即ち a

の音は吾人の最も得難しとする處にして awe s, oh, ball s, bowl, called s, cold, for s, fore, tall s, toll, ought s, out, war s, wore 等に明白に區別し得るものは決して多からず、而して之が爲め種々の悲しむべき誤解と不便とを生ずるとあり。然るに此も適當なる方法によりて始めより學べば極めて容易に學び得らるゝものなりとす。

(三) (即ち a) と (即ち u) の區別。例、dog と dug との如し。toll と dally, dock s, duck, rook s, ruok, vander s, vunder 等は屢無區別に發音せらるれども、明白なる區別あるなり。たとへば u は口を自然に少しく開き其儘動かさずして音を出せばよし。又 a は口の奥を丸く廣げたる心持ちにて發音して得らるゝなり。

此等に就いては英語教師たらんものは、先づ已れ正確なる發音を得置かざるべからず。而して其上にて能く理論に通じ、口舌を如何にせば日本の學生は能く適當なる發音を爲し得るや、又如何なる理由ありて彼は正確なる發音を爲し得ざるやを明かにし、場合に應じて相當なる療法を施さざるべからず。



始めて英語を學ぶ者には教師が始めより嚴重に區別して教ゆれば學生は困難なくして覺ゆるなり。又既に區別せざる感習ある學生には教師たるもの殊に注意して種々の方法を工夫して其發音を匡正せざるべからず。元來日本語は發音器即ち口舌等を餘り動かさずして云ふものなるが、之に反して英語は發音器の活潑なる運動を必要とするものなり。殊に母音に於て然りとす。故に母音の發音を正確且つ自由ならしめんには發音器の運動法と獎勵否勵行せざるべからず。たとへば唇運動 (Lip exercise) の爲めには *ph-e-a* を連唱せしめ、脣運動 (Jaw exercise) の爲めには最も大切なる二重音 *oi-ai-an* を連唱せしめ、母音の區別を爲さしめんには *ai-o-i-e* 或は *oi-o-i-a* 或は *ai-o-o* を連唱せしめ、又發音器全體の運動の爲めには *sh-e-e-l-o-o-e* を連唱せしむる等枚舉に遑あらず。

次に子音即ち *Consonants* の中にて日本人に最も得難く又最も間違へ易くして而かも正確に得ざるべかるものを擧げん。

- (一) 一音 *i* を正確に得るは最も肝要なり。そは *i* は英語には最も屢々起る子音の一なればなり。然るに日本の英語を學ぶ者、否、英語を教ふる者の中にも此字の正確なる發音を知らざるもの少からず。否、*r* と *i* の間に區別あるとすら知らざるもの多し。要は始めより *i* 音の日本語になきとを説き、舌端を上の前齒の裏に押し付けたるまゝにて發音すべきとを教へ、而して *i* 字の起る凡ての場合に於て發音器の此の正確なる位置を爲さしむるに在り。然らずんば非常なる失策に陥るとわらん。たとへば *Light* が *right* と變じ *Play* が *pray* と化し、*Lice* が *rice* と混するが如し。

- (二) *th* の清濁二音。 *th* の清濁二音も亦日本人の得難しとする處なれども、此等は決して *i* の如く甚だしからず、予の實驗によれば、*th* の正確なる發音を我國の學生に得しめん、舌端を上下の前齒にて痛みを感ずる程噛ましめ、其儘にて、*th* の清音を出すには單に呼吸を發せしめ、濁音を出すには音聲を發せしむるを便方とす。斯く始めより良習慣を得しむるにわらずんば、*th* は *s* 或は *z* と混じて區別なきに至らん。たとへば *Think* が *sink* となり、*Myth* が *miss* とな

り、Breathe が breeze となるが如し。

(三) t 音と d 音。日本語のタチツトを英字にて ta chi tsu to と書き  
ダヂツドを da ji zu do と書く一事より考ふるも、日本語に ti tu  
及び di du の音無きと明白なり。従つて此等を發音すると易からず。  
舌端を上腭の前部を強く押し當てたる儘にて、單に呼吸を發せん  
とするは t 音の形狀にして、音聲を發するは d 音の形狀なり。此等  
始めに於て嚴重なる練習を要す。

(四) f 音と v 音。f 音はフ音同一と心得る者多けれども、其實然らず。  
我フ音は上唇と下唇との間より出づる音なれども、f 音は上の前  
齒にて下唇を壓したる儘にて單に呼吸を發するものなり。又 v 音  
は同じ形狀にて音聲を發して得らるゝものなり。故に v 音と b 音  
との間には明白なる區別あり。然るに Fox を box と讀み Filly を  
hilly と讀み velvet を berbet と讀むは決して稀れのことにあらず。

(五) s 音と sh 音。我がサシスセツは全く sa si su se so と同一にはあ  
らず。さればとて sha shi shu she sho にもあらずるは明白なり。云は、v 一種の

中間音とも見るべきものなり。故に吾人に取り go と She とを明  
白に區別するは困難なりとす。たとへば She sells sea shells, なる一文  
章を正確に音讀するは決して容易ならず。

(六) wh 音。wh は hw と發音すべきものなるが、是れ又嚴重なる練習を要  
す殊に注意すべきは who てふ一語にして、此は決して「フ」と發音す  
べきものにあらずして hu と發音すべきものなり。即ち唇を用ゐず  
咽喉の奥にて強く音を發して之にウーを付すべし。試みに自ら省  
みよ、Ho ho を單にヒー、フーと讀まざるや否や。

此等は困難なる子音の重なるものなるが、此等及び其他日本語の子  
音と同じからざる子音を正確に發音し得んには、種々の注意と工夫を  
用ゐざるべからず。今此等の注意又工夫につき試みに二三を擧げんに、  
一、子音も亦母音と同じく一音を發するには發音器の一定の形狀を  
必要とするものなるが故に、先づ各子音に對する發音器の一定の形狀  
を熟知し置き、場合に應じて自由に之を活用し得ざるべからず。然らず  
んば遂に正確なる發音を爲すと能はざるべし。音聲は發音器の形狀に

よりて定まるものなれば、一形状をなして毫も口舌を動かさざれば一音を發し得るのみにして、決して他の音を發し得べきものにあらず。故に先づ發音器の一定の形状を知らざるべからず。知つて後には之が練習を爲さざるべからず。殊に日本語は子音の場合に於ても母音の場合と同じく、發音器を活潑に運動せしめずして發音する言語なるが故に英語を學ぶに當りては教師たるものは必ず學生に發音器の活潑なる運動を爲さしめざるべからず。たとへば *ra ri ru re ro* と *la li lu le lo* を區別し、*ba di bu be bo* と *va vi vu ve vo* を區別し、*sa ai su se so* と *sha shi shu she sho* と *tha thi the tho* を區別し、又 *za zi zu ze zo* と *da di du de do* と *tha thi the tho* と *ja ji ju je jo* とを區別して發音せしむるが如し。――(二) *p t k* と此等の濁音なる *b d g* とは十有餘萬の英語中比較的大多數の語の語尾に来るものにして、此等を正確に發音すると最も肝要なりとす。元來日本語は連音語なれば子音のみを單獨に發音する場合殆んど稀なるが故に、此等六子音か語尾に来る時には、吾人は自らウ或はオなる母音を加へて發音し易し。然れども *p* は *プ* にあらず、*t* は *ト* にあらず、*k* は *ク* にあらず。又 *b*

は *ブ* にあらず、*d* は *ド* にあらず、*g* は *グ* にあらず。云は *p* は *プ* よりウを除き、*t* は *ト* よりオを除き、*k* は *ク* よりウを除きたるものなり。之を方程式にすれば  $P = \text{プ} - \text{ト} = \text{ト} - \text{ク} = \text{ク} - \text{ウ}$  となるなり。故に常に學生をして *pu to ku bu do gu* の間に一線を書して *bu to ku bu do gu* となし、兩側の母音と子音との分離すべきことを知らしめざるべからず。又たとへば *u* を *ドク* と云はしめずして *ドク* と云はしめ、*グ* のウを後に加へずして *ツ* と抑へて前に入るべきことを知らしめざるべからず。是れ明確なる英語の發音に必要缺くべからざることにして、而かも非常なる練習を爲すにあらざれば得る能はざるものなりとす。而して之が練習を爲すには、此等の前に母音を加へ此處に力を入れて強く切つて發音し、決して後に母音の聞えざる様注意するを唯一良法とす。たとへば *ap ip up ep op*、*at it ut et ot ak ik uk ek* 等の如し。――(三) 此等及び其他凡ての子音は母音若しくは他の子音と連結して一語若しくは一連音を形造るとあり。此等の場合に於ては發音すべきは子音も母音も共に悉く明白に發音せざるべからず。然らずんば已れの云ふとは悉く人に通せざるか、或は然らざ

るも悲しむべき間違を生ずるとあらん。而して此は決して容易の事に  
 わらず。始めより注意して發音器の運動を實行するにあらざれば到底  
 望むべからざる結果なりとす。母音あらば之を落すべからず。母音なく  
 んば子音と子音との間に之を入れるべからず。入れず落さずして凡てを  
 明確に發音するは決して容易ならず。たとへば gods, dogs, shelf, selves,  
 holds, worlds, cloths, sixths, little, settledst, thinks, thanked, length, depth 等の發音  
 を試みよ。必ず思ひ半ばに過ぎん。此種の練習の助けとしては常に左の  
 如き文句を暗誦するを良しとす。たとへば Lily leaves, lovely lady. she sells  
 sea-shells. The flaming fire flashed fearfully in her face. 及び

Amidst the mists, with angry boats,

He thrusts his fists against the posts.

And still insists he sees the ghosts. 等の如し。

(二) 綴字

英語の母音及び子音に關して日本人の困難を感ずる點は略ぼ上述の  
 如し。綴字法に關しても亦日本人には特種の困難と之に應ずべき方法

あり。乞ふ少しく之を云はん。

英字は我假名の連音的なるを異にして字母的 (Alphabetical) なるが故  
 に、字母 (Letters) を結合して連音 (Liaison) を組織し、又連音結合して語 (Words)  
 を組織す。さて斯くして組織せられたる連音或は語の發音は如何と尋  
 ぬるに、實に甚だ不規則にして混雜なるを發見す。とは英語には綴字法  
 と發音法との間に一定の關係なく、同字にして異音なるとあり、異字に  
 して同音なるとありて、發音のみにては其の連音の綴字如何を確定す  
 ると能はざればなり。故に英語の綴字法は既に英米人の甚だ困難とす  
 る處、況んや外國人たる吾人日本人に取りて其の困難なるべきは蓋し  
 云ふを待たざるなり。たとへば母音に就いて一二の例をげんに。の長  
 音エーイを示す綴字法には、late に於ける e の外に、sail に於ける e と  
 range に於ける au と、lay に於ける ay と、great に於ける ea と、freight に  
 於ける ey と、they に於ける ey との六種あり。e の長音即ちイーを示す  
 綴字法にも、me に於ける e の外に、meet に於ける ee と、heat に於ける ee  
 と、seize に於ける ei と、people に於ける eo と、key に於ける ey と、brief に

於ける *ie*、*unique* に於ける *i* の七種あり、*i* の長音には九種、*o* の長音にも九種、*u* の長音にも亦九種あり。其他の母音は推して知るべし。又子音に就いて云んに、母音の如くは不規則ならずと雖も、たとへば *k* 音を示すには *kie* の *k* の外に、*gan* に於ける *g*、*chord* に於ける *ch*、*ough* に於ける *ou*、*quite* に於ける *qu* の四種あり。又 *sh* 音に至りては *shine* の *sh* の外に、*Ocean* に於ける *ce*、*social* に於ける *ci*、*chaise* に於ける *ch*、*pension* に於ける *ps*、*sure* に於ける *s*、*issue* に於ける *ss*、*notion* に於ける *ti* の七種あり。豈不規則の極ならずや。

さらば此等は如何にして記憶すべきや。何か簡便なる方法ありて、如何なる場合には此種の綴字法により、又如何なる場合には彼種の綴字法によるかと云ふとを判定し得るや。曰く否、殆んど斯る方法なしと云ふを事實に近しとす。故に吾人は殆んど各語に付き各連音につき、個々別々に綴字法を記憶せざるべからず。唯時に多少便利なる規則を發見し得るのみ。然れども此等の規則も屢々例外なるものありて、規則を知るが故に、返つて間違に陥るとあり、されども全跡より云へば此等は知りて

利益多ければ吾人は可成之を知るを便なりとす、今試みに此等の簡便なる規則の二三を擧げん。

(一) 一連音の語に在る單母音が長く即ち名の通りに響く時は最後に響かざる *e* を取るを規則とす。例 *Take*、*mete*、*kite*、*hole*、*Hute* 等の如し。然れども此規則には多くの例外あり。而して例外は長母音の後 *e* の前に *ye*、*rye*、*rye* 等のある場合に多しとす。たとへば *Bade*、*Com*、*Some*、*noue*、*done*、*gone*、*care*、*lose*、*have*、*dove*、*love*、*move* 等の如し。

(二) 一連音の語が一子音にて終はり且つ其前に單に一母音を有するか、一連音以上なる語の最後連音が上述の通りにして且つ茲にアクセントを有する時は、必ず最後の子音を二重にして後に、*er*、*est*、*er*、*ing* 等の語尾を附するを規則とす。たとへば *ask* と云ふ語は *asker*、*est*、*ing* と *k* と二子音にて終る故に、又 *look* は一子音 *k* にて終るも前に一母音 *o* あるが故に、又 *limit* は一子音にて終り且つ其の音に一母音を有するも、アクセントが前連音 *i* にあるが故に、其儘にて此等の語尾を附するなり、*Asker*、*looked*、*limiting* 等の如し。然れども *map*

は一子音にて終はり且つ其前に一母音あるが故に、又 *remite* は二連音の語なれども最後連音が上述の通りにて終り且つ茲にアクセントあるが故に、共に最後の子音を二重にして後に、此等の語尾を取る。 *mapper, map-pest, remitted, remitting* 等の如し。

三) *con s' com' en s' em* 等の如き場合に、*n* なるや *m* なるや疑はしきと屢々之あり。此等の場合に、*m p b* の前に *m* にして其他は *n* なるを規則とす。たとへば *intense* なれども *immense* なり、*enter* なれども *emperor* なり、*confine* なれども *combine* なるが如し。此の規則は甚だ便利なれども時々例外あれば注意を要す。たとへば *innate, unpack* 等の如し。

四) 語尾が *tion* なるや將た *sion* なるや疑はしき事往々あり。此等の場合に於ては其前に母音ありて *yo* と濁るか、或は其前に *o* 或は *n* が來たる時は *sion* にして其他は *tion* なりと知るを便利なりとす。— *fusion, delusion, occasion, passion, mission, profession, tension, con-prehension* 等の如し。 *attention, intention* 等々或は *tive* にて終る語より來るは

例外にして、*tion* となり *sion* とならずと知るべし。

五) 同、とく *i* と長く響きながら母音の順序が *ie* なりや *ei* なりやと迷ふとあり。此時には前に *o* の有無如何を考ふべし。而して *o* ありば *ie* にして *o* にあらずと知るべし。又斯く *ei* の時は其語が *ception* と變化し得るを常とす。たとへば *Receive* の *reception* *deceive* の *deception* *conceive* の *conception* 等の如し。之に反して *Brief, believe, relieve, siege, frieze* 等は皆 *o* なく又 *ception* とも變化せざれば *ie* にあらずして *o* なり。尤も *o* は例外あり。

此等の外にも此種の規則は數多あり、且つ少しく注意して研究すれば自ら發見し得らるゝものとす。此等は單に規則としてよりも實際の必要に應じて時々學生に教ゆべく、殊に此等の規則を發見する方法を知らしむべし。是れ學生をして大に其能力の浪費を避け得せしむるものにして、甚だ大切なるとなりとす。

前にも云へる如く英語の綴字法は、單連音の語に於て不規則なるのみならず、多連音の語に於て殊に然りとす。此等の不規則なる點を一々舉

げんは到度望み得べきにも又望ましきにもあらざるべければ、今は單に Syllabication 即ち語を連音に分解する方法につき、常に學生に教ゆべき大跡の規則を擧げて満足せんとす。是れ一には多連音なる語の字を簡便ならしめんが爲めにして、又一には次きの條目に於て論せんとするアクセントの準備を爲さんが爲めなり。多連音の語を分解するに當りては、學生をして常に次の四則を記憶せしむるを有益なりとす

(一) アクセントを有する長母音即ち a e i o u は次きの子音を取らずして連音の終りとなる。一例 A-corn, bā-ker, ē-qual, i-dē-a, rī-dol, ō-pen, mō-ment, ū-nit-y, com-mū-nit-y 等の如し。

(二) アクセントを有する短母音即ち a i ū ē ō は次きの子音を取つて連音を組織す。一例 An'i-mal, fam'i-ly, en'e-my, nec'es-sary, lim'it, phū'ish, bōf'a-ry 等の如し。

(三) アクセントを有せざる a e i o u は次きの子音を取らずして連音の終りとなる。一例 A-way, ein-nā-mon, dē-ree, ē-vent, A-dē-a, ō-bey, prō-pose, ū-nite 等の如し。

(四) 同種或は異種の子音が二の重なる時は、之を前後の連音に分配するを常とす。一例 Ab-bōf, con-nect, in-ten'tion, pos-ses'sion, ac-com'plish-ment 等の如し。

此等は Syllabication の極めて大跡の規則にして、此他に多くの細則あるは云ふ迄もなき事ながら、此等丈けにても能く會得し置くは種々の點に於て利益多し發音上に非常なる關係を有するは、今更ら云ふ迄もなく、書取の際語を切る時に於て、今英詩の韻律を解するに於て、甚だ有益なるものなれば、綴字法を教ゆるに當り教師は學生をして必ず Syllabication の此等の規則に習熟せしむるを要す。

(三) アクセント

英語を正則的に學ばんと欲する者は、先づ字母の發音を熟知し、次に連音の發音を熟知し、又次に語の發音を熟知するを要す。字母の發音を知れりとして連音の發音を知れりとは云ふべからず。況んや語の發音に至つては、連音の發音のみの智識は未だ全跡の勢力の一小部分に過ぎざればなり。そは一連音以上の語には所謂アクセントなるものあり

て、一定の連音(否寧ろ其の母音)を音聲を上げて強く發音するの必要あればなり。英語の綴字法の不規則なるとは前條に於て少しく之を述べたるが、アクセントの不規則なるに至つても、等しく甚だしきものありと云ふべし。而してアクセントを理解せんには綴字法殊に Syllabication の智識を要すると同時に、綴字法を理解せんにも亦アクセントの何者たるを熟知するを要す。されば英語の一語を覺えんには意味と綴字とアクセントとの三者を覺えざれば、決して完全なりとは云ふべからず。今日迄の英語の教授法にては、綴字には多少注意することあるも、一般にアクセントの如何を教へざるが故に、云はば學生は實際一語につき單に三分二の智識を有するのみ。然るに此のアクセントは英語に取りては最も必要なるものにして之に注意せずんば此方より云ふ事は如何に反覆するも、遂に先方に了解せられずして止むに至るなり。殊に英語のアクセントは強きを要し且つ甚だ不規則にして殆んど個々のに暗記するの外なきが故に、日本語の如き殆んどアクセントを有せざるが如き言語に慣れたるものに取りて甚だ理解し難く、且つ理解するも

實際に應用し難きものなりとす。然れどもアクセントは苟も正則に英語を學ばんとするものに取りて肝要なるものなれば、如何に煩雜なるにせよ面倒なるにせよ必ず之を暗記し之を實行せざるべからず。字母の發音と云ひ綴字法と云ひ又アクセントと云ひ今日迄長く變則的に英語を學び來り既に多少書物の讀める人々が頓に之を聞く時は、甚だ煩雜にして絶望的なるが如く思ふべけれども、*ルビ*の始めより正則なる教師に従ひ一字一語正確に學ぶ者に取りては、それ程困難なるものにあらず。中途より正則に轉ずる人々の感ずるが如き困難をば感せずして濟むなり。故に英語を比較的容易に學ばんと欲する者は、始めより萬事に正則なる教師に付きて學ばざるべからず。萬事に正則ならざる教師に就くは、學生の爲め非常なる損害なり。故に子弟に英語を學ばしめんと欲する父兄は、最も此事に注意せざるべからず。又斯くの如き譯なるが故に英語教師たる者は殊に責任の重きを感じざるべからず。已れに就きて學ぶ者の爲めのみを考ふるも、已れは正則に轉せざるべからず。況んや教師の教師たらん者に於てをや。初めて學ぶ者に取り



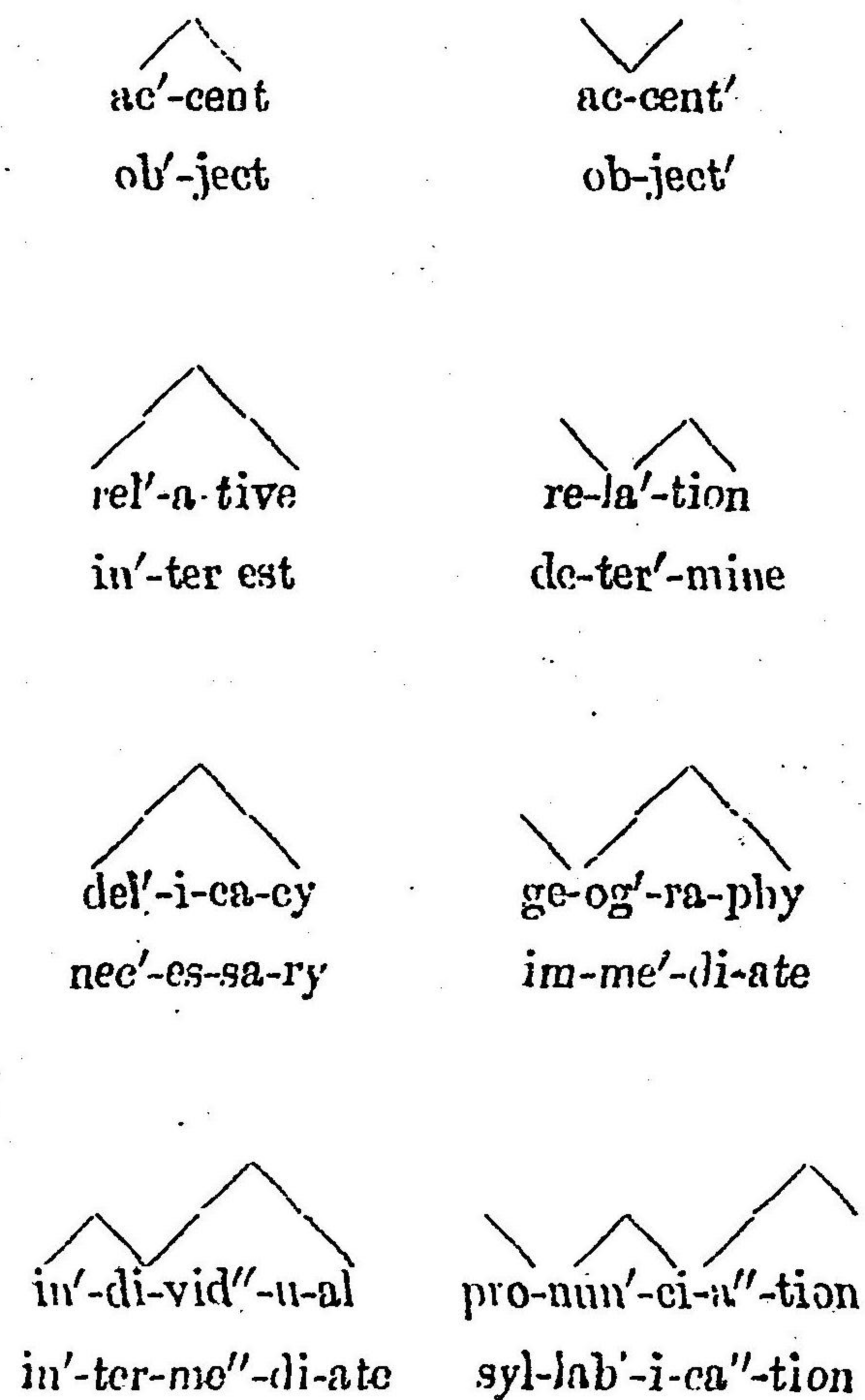
りても又中途より轉ずる者に取りても、正則の發音及びアクセントの困難なるは、始めの間に於てのみ、二三ヶ月乃至半年間も辛抱して且つ學び且つ正さば、自ら大に改良の快を感じ得べけん、要は教ゆる者も學ぶ者も明確に學び嚴重に正し、一字一音をも忽にせざるに在り。或は山の一音にても、或は一綴の發音一語のアクセントにても、之を輕んじ擲つとあらば、惡習直ちに力を得て、心は恰も水の低きに就くが如く流下して遂に挽回するの望なきに終らん。

さらば一連音以上の英語には悉くアクセントあるとし、且つアクセントの位置は甚だ不規則なるに係らず各語に於て一定し居るとし、且つ又此等を知らざれば英米人に分る様讀めも話せもせぬとして、さて此のアクセントなるものは抑も如何なるものにして、又如何にせば此を最も明確に又最も容易に學び且つ教へ得るや、是れ實に大問題なり。アクセントに就ては泰西の學者中種々の説ありて或る人々はアクセントは音聲を強く出だすにて即ち強音なりと云ふ、是れ(一)強音説なり。又或る人々は云ふ、必ずしも音聲を強く出だすにわらず、高く發する

なり、へびるにわらずして揚げるなりと、是れ(二)高音説なり。又或る人々は云ふ、否、アクセントとは聲を強むるものにわらず、又高めるにもわらず、只其の連音中の母音を比較的長く引くとなりと、是れ(三)長音説なり。然れども予は此等の諸説には共に感服する能はず、各説共に一部分の眞理を有するに相違わらざれども、各々一方面に僻して眞理の全脈を包容せず。故に予は他の一説を呈して、アクセントとは音聲を容易に即ち樂に出だす事に外ならずとの(四)樂音説を主張せんとす。音聲は如何にせば樂に出づるや、曰く少しく頭を上ぐる時、云ひ換ゆれば口と咽喉とが直角に屈折せずして直線に近づく時、音聲は最も樂に出づるなり。故にアクセントは聲を高く揚ぐるにわらずして頭を揚ぐるなり。斯くて音聲は自ら揚がるなり。又必ずしも強く云ふにわらず、頭を揚ぐれば發音器が直線に近づくが故に、空氣の出入自由となりて自ら音聲は高くなるなり。又必ずしも音聲を長くすと云はざるを宜しとす。そは斯く云へば弊害を生ずればなり。それよりも樂に發音すれば音聲は自然に自由に出づるが故に長くなるなり。此等は皆結果にして要は頭を

上ぐるに在り、樂に發音するに在り。是れ予の樂音說の大要なり。此の說の絶對的の可否は暫く置きアクセントに慣れざる日本人にアクセントを教ゆるは、極めて便利なる方法なりと信ず。そは此れによりて所謂音聲の上下屈折を明白に教へ得べければなり。既にアクセントのある連音は樂に音聲の出づる連音なりと云へば、其前後のアクセントなき連音は頭を上げず即ち頭を下げて發音することとなる故に此法によれば頭は一連音の發音と共に一運動を爲す譯なれば、二連音の語には二運動、三連音の語には三運動、四連音の語には四運動等と云ふ割合なり。而して此等の運動が上下如何に變化するやは、語に固有なるアクセントの位置によりて定まるものとす。たとへば Accent と云ふ語は動詞の時は Accent' にて頭は acc' にて下に一運動を爲し、次に accent' にて上に一運動を爲して終るなり。又名詞の時は其反對にて accent' にて上り accent' にて下るなり。又 Relation と云ふ語は Relative は Rel-a-tive 故に先づ下り、中で上り、終りに再び下るなり。然るに Relative は Rel-a-tive なるが故に先づ上り、次きは二度共下るなり。斯く二度共下る場合に於

ては始め上る時に、二度下り得る丈け十分上げ置かざるべからず。斯くの如くなるが故に此法による時は如何なる六つかしき長くして數個のアクセントを有する語も、面白く容易に而も正確に發音し得るものなるが、今は單に此法の原理を示すのみ。詳細は別に説く時に譲るべし。



右の表によりて明白なるが如く如何なる長き語又アクセントを一以上有する語にても、容易に發音し得るなり。要は(一)一連音に對し精密に

上るか或は下るかの一運動を終始すべきこと、(二)二度以上續けて頭を下くべき必要あらば豫じめ其の積りにて必要なる程、頭を上げ置くべきこと、(三)漢字の畫數と英語の連音とを同一視し、連音多き語を畫の多き漢字の如く思ひ、早く一度に發音せず、寧ろ連音を單位と思ひ、ユル々々明白に發音すべきと、即ち二連音の一語は一連音の語二字程時をかけて發音すべきと等なり。

此法は始めには餘りに細工的機械的なるが如く思はるゝが故に、妙な感情を催ふす人もあるべけれども、試みに之を一ヶ月間已れも試み學生にも試みしむべし。結果は必ず彼をして思半ばに過ぎしむるに至らん。茲に注意し置くべきとあり。予曾て此の樂音説を或る米國人なる英語教師に語りしに、彼曰く、吾は發音の際斯く頭を上下せずと。予を以て之を見れば、彼が頭を上下せざるは、既に上下せずして能くアクセントを爲し得るが故なり。吾人日本人に取りては、即ち然らず。予の云ふ處は前にも云へる如く、殊に日本人に英語を教ゆる上に就ての便法なり。故に予の立場より云へば、彼の教師こそ已れの言によりて、己れ未だ英語

に對する日本人の疾病を知らざがとを自白せるものなるのみ。以上は既にアクセントの一定の所在を知りて後に、如何に此の智識を實現すべやの方法に關して云へるなるが、是れ既に難事なり。然れども之よりも優りて難事は、個々の語につきてアクセントの一定の位置を記憶するに在り。十語は十語、百語は百語、千語は千語、殆んど特別に其のアクセントを暗記せざるべからず。是に於て乎アクセントに關する一定の規則の有無如何てふ問題は起り來るなり。抑も此等の規則は無きにあらざれども、其數多くして煩雜なれば、悉く覺るんは到底容易の業にあらず。況んや規則に例外多きに於てをや、然れども中には記憶し易くして而かも甚だ有益なる規則あれば、此等は機會あり次第に教ゆべきものとす。然れども此等を單に抽象的規則として一括的に教へんは宜しからず。寧ろ實際の必要により時々、又別々に教へて自然に暗記せしむるを要す。今此の規則の數例を示さん。

- (一) a 及び ad 若しくは ad の變化にて始まる二連音の語は、最後即ち第二連音にアクセントあるを常とす。a-bout, a-bove, a-long, a-lone, a-way,

- (一) *ad-vice*, *ad-dress* 等の如し。
- (二) *Be De Re Se Pre* 等にて始まる二連音の語は最後即ち第二連音にアクセントあるを常とす。—*Be-fore*, *be-long*, *be-yond*, *de-pend*, *re-ceive*, *se-crete*, *pre-sent* 等の如し。
- (三) 二連音の語にしてアクセントの變化するものは名詞の時は前に、動詞の時は後にあるを常とす。—*Ob-ject*, *re-cord* 等の如し。
- (四) 如何なる連音の語にても *ion* にて終はる語は必ず其前にアクセントあり。—*Na-tion*, *do-na-tion*, *com-po-si-tion*, *civ-il-iza-tion* 等の如し。
- (五) *Sive* にて終はる語は直ぐ前の連音にアクセントあるを常とす。之に反して *tive* にて終はる語は其前に子音の來る時の外は前々連音にアクセントあるを常とす。—*De-lu-sive*, *co-he-sive*, *pos-ses-sive*, *suc-ces-sive*, 等は *sive* の例にて、*Rel-a-tive*, *pos-i-tive*, *ob-ject-ive*, *per-cep-tive* 等は *tive* の例なり。尤も *tive* の規則には時々例外あり。たゞ *ad-ject-*

- tive* の如し。
- (六) *Ate* にて終はる三連音及び三連音以上の語は語尾より第三連音にアクセントあるを常とす。—*Cal-ci-vate*, *del-i-cate*, *gen-er-ate*, *pred-i-cate*, *ob-liv-er-ate* 等の如し。
- (七) 若しくは *ical* にて終はる語は直ぐ其の前にアクセントあるを常とす(但し少數の例外あり)。—*Com-ic*, *log-ic*, *re-public*, *math-e-matics*, *chem-ic-al*, *ge-o-graph-ic-al* 等の如し。
- (八) *ity* (或は *ety*, *etry*, *istry*, *ilty*) 如にて終はる語は直ぐ前にアクセントあるを常とす。—*pol-i-ty*, *so-ci-e-ty*, *ge-om-e-try*, *chem-is-try*, *fac-til-ty* 等の如し。
- (九) *-able* (或は *-ible*) にて終はる三連音以上の語も亦直ぐ前にアクセントを有するを常とす。—*pass-a-ble*, *pos-s-i-ble*, *ad-vi-sa-ble*, *ad-mis-s-i-ble* 等の如し。
- (十) *self* 或は *selves* にて終はる二連音の語のアクセントは決して前の連音にあることなく、必ず此連音に在るものとす。—*My-self*, *our-selves*,

him-self, them-selves' 等の如し。

(十一) ishにて終はる語は決してishにアクセントを有ずるとなし。Pun-ish, pun'ish, pub'lish, fool'ish, ac-count'pish, dis-tin'guish 等の如し。

(十二) ingにて終はる語も亦決してingにアクセントを有ずることなし。—Be'ing, hav'ing, do'ing, go'ing, play'ing, sup-posit'ing 等の如し。

此等の規則は他に其數多しと云へども今は單に我國の學生に最も大切なるものを擧げたるのみ。而して此等は決して單に規則として暗記せしむべからず。單に規則としての暗記は實際に用をなさずして、單に記憶力を浪費せしむるのみ。必ずや實例に接する毎に、類似の例證を擧げて、自然に規則を悟らしむべし。云はゞ學生をして自然に規則に感染せしむべきなり。

(四) 讀方

中學に於ける今日の英語教授法を見るに、其の目的は全く譯讀に在りて其他は凡て之が附屬物たるが如きの觀あり。たとへば讀方の如き一度或は二度教師か或は生徒によりて爲されざるに<sup>は</sup>あらず。然れども何

の爲めに讀方が爲さるやの目的に至りては殆んど了解せられざるに似たり。讀方は爲されながら、同時に餘殘物の如く寄生物の如く邪魔物の如く思はれつゝあるなり。譯讀の前には一度は讀まねば調子が悪い位が一般なるべし。然るに予を以て之を見れば、讀方は最も大切なるものなれば、英語の教授たらん者は、能く讀方の目的を會得して、此の目的に到達せんことを力めざるべからず。如何にせば最も適當に讀み得るやに就き大に研究し又習練する處なかるべからず。

元來讀方は今讀みつゝある書物の意味を十分了解するにあらずんば、到底適當なるを望むべからず。否、たとへ意味を十分了解すればとて、それのみにて決して上手なる讀方を爲し得るにあらず。意味を了解せる上に、殊に讀方の術に通せざるべからず。況んや意味を了解せずして單に盲讀するに於てをや。試みに今日に於て教へらるゝ讀方が、果して意味と共に総合的に教へられつゝありや、或は單に譯讀の前には一度は音讀するの習慣なりとして教へられつゝありやを研究せよ。今日は實に譯讀を重んじて讀方を輕んずる時代なり。豈に天地の顛倒にあらず

や、何時迄も譯讀すべきものとして教ゆるは愚なり、固より中學卒業生をして譯讀によらずして普通の書物を了解し得るに至らしめんは、今日に於ては望み難きとなるべきも、理想は常に茲に存せざるべからず。英語を教ゆる目的に、生徒をして譯讀によらず通讀して、意味を了解し得しむるに在るべきなり。一々書物を譯讀せんは實に多くの時間を要す。之に反して通讀したるのみにて意味を了解し得んには、之が爲めに生ずる利益は決して單に時間の節儉のみにあらざるべし。先づ時間の節儉に就いて考ふるも譯讀に比して幾倍の利益あるべきや。慥かに五倍七倍の速力にて讀書し得るの利益あらん。即ち譯讀して一冊の書を讀む間には通讀ならば五冊七冊を讀み得る譯なり。人生五十年に積りて考ふれば、兩者の差異は實に莫大なりと云はざるべからず。而して通讀の利益は決して單に時間の節儉のみにあらず。凡そ文章の美は云はゞ半ばは音調の美なるが故に、通讀して意味の了解せられざる習慣の人は、到底此の音調上の美を味ふと能はざるべし。散文に於て然り、況んや韻文に至りては、到底之を音讀して其美を感ずるにあらざれば、遂に

之ふ者とは云ふべからず。若し人あり英文を譯して其美を知ると云はゞ此は單に思想の美を知るのみ、若しくは譯文の美を知るのみ。決して英文其者の美を知るにはあらず。

故に中學に於ては今日よりも優りて讀方に注意せざるべからず。學生をして遂には譯讀せず通讀して意味を了解し得しむるを理想として、讀方を教へざるべからず。即ち中學生が讀本の第一巻を讀む時より、意味と讀方とは總合せられ兩者は年と共に漸々接近せしめられ、遂に譯讀は讀方の中に形を隠くすに至らざるべからず。少くとも斯る理想を以て英語は教へられざるべからず。而して之を爲すには種々の方法あるべく、會話をも文法をも作文をも皆此の目的の爲めに利用せざるべからざるが、今日の處最も注意すべきは讀方の改良なるべしと思はる。兎も角も實際讀方は一度か二度は是非なされつゝあるとなれば、之をして意味あらしめ従つて有益ならしむるは、甚だ肝要のとなるべし。たとへば讀方を有益ならしむる一方を示さん。今日は一般に先づ讀方を爲して次に譯讀を爲し而して其儘に棄て置く習慣なるが、試みに

二者の順序を轉倒せしめよ。即ち先づ學生をして譯讀せしめ意味を明白にして後に音讀せしむべし。能くすると習慣とならば、自然に意味と讀方とは連絡せられ、不知不識の間に學生は通讀して意味を了解するに至り、非常なる利益を得るに至らん。故に予は英語の教師たる者は今日の如く譯讀の稽古を譯讀にて終らしめず、讀方にて終らしむるを規則とすべしと主張するものなり。

今日の讀方は意味に伴はざる讀方なる故に、何れの方面より考ふるも讀方の實なきなり。讀む者も讀む處を解せず、又聽く者をして解せしめんとも思はず。讀方の目的、それ那邊に在りて存するや。既に讀む人に於て意味を解せずして讀む、いかで能く聽く人に了解され得んや。或る人々の間には一種の迷信ありて、何でも平でも早く達者に讀めば、それにて讀方の目的は達せられたりと信せらる。然れども讀方の目的は、一には讀下したるのみにて已れが意味を了解せん爲めなるが、又一には聽く人をして同じく了解せしめんが爲めにあらずや。さらば聽く人が了解し得ざる様に、或は讀み或は演説するは、名譽なりや。將た耻辱なりや。

此頃の英語會なるものを見るに、或は讀方に或は暗誦に或は對話に、徹頭徹尾殆んど英語なりや何語なりやすら明白ならざるを演じて、上手なり達者なりと人も思ひ已れも亦信するもの多きに似たり。何ぞ美服を着けたる積りにて、實は下着の儘なりし昔話の王者と似たるの甚しきや。既に了解せられず。豈に下手と上手の區別あり得べけんや。

されば讀方に貴き處は自らも解し聽く人も解し得る様に讀むに在り。而して之が爲め必要なるは讀方の速力にあらすして明瞭なるに在り。明瞭に讀むは一見甚だ容易なるが如くにして、實は甚だ困難なるとなり。乞ふ試みに英語を明瞭に讀むと云ふと、が果して幾何の内容を有するやを研究せしめよ。

英語を英米人が可成明瞭に意味を了解し得る様に音讀せんには、先づ前に述べたる、(一)字音の發音、(二)各語のアクセントを明確に知り且つ明確に讀まざるべからず。是れ既に決して容易の事にあらず。試みに讀本の第二或は第三巻を開きて一頁を讀め、若は此一頁中に在る凡ての字母を一も誤らず一はにthはthに讀み得るや、又凡ての語のアクセント

を一々知り居るや否や。斯く考ふれば讀本の一頁を讀むすら決して容易ならず。而して凡ての字母を明確に發音し又凡ての語のアクセントを明確に讀むは讀方の根本なれば、此の二事にして満足に出來ずんば到底完全なる讀者なりとは云ふべからず。然れども此等二者を満足に爲し得ればとて、そのみにて彼は決して上手なる讀者にはあらず。彼をして讀方の達者ならしむるには、此外に必要なと少からず。而して此等は實に今日の英語授法の一般の缺點と思はるゝが故に、試みに左に要點一二を擧げて例とせん。

(一) 語と語を餘り離して讀むべからず。一字一語を明瞭ならしめんと欲すれば、語と語は自ら離れざるを得ず。然れども語は集りて句を爲し句は集りて節を爲すものなるが故に、一句一節中の語を餘り離して讀む時は、全肺の意味は不明瞭となる譯なり。要するに意味と共に讀むと必要なり。意味と共に讀まざるが故に一所に讀むべきを離して讀むは失策は生じ來たるなり。

(二) 語と語を餘り接して讀むべからず。前の失策を避けんとして陥る

は反對の極端にして、語と語を餘り接して讀む習慣なり。是れ一般の弊風とす。斯するが故に、所屬違ひの語と語が連結して所謂ナギナタ讀みなるものを現出す。たとへ然らずして同所屬の語の爲めに發音の曖昧を生じ誤解を來たすと屢々之あり。たとへば His little eyes が His little lie と變じ、He was killed in war が He was skilled in war. と變するが如し。

(三) 句讀點に注意して讀まざるべからず。句讀點には、? ! 等を始めとして、; : 等種々あり。此等は一定の規則に従ひ音聲の休息すべきを示すものなれば、讀者に於ては能く之に注意して、意味に従ひ適當に休息せざるべからず。然らずんば大なる誤解若しくは難解を來たされ。又時には句讀點なくして而かも休息すべき場所も少からず。此等は意味によりて、自ら知り得らるゝなり。

(四) エンフアシスに注意せざるべからず。アクセントの一語に於けるはエンフアシスの一文章に於けるが如し。適當なるアクセントなくんば一語の明瞭なちざるが如く、適當なるエンフアシスなく



んば、一文章の意味は遂に明瞭なると能はず。たとへば、*I walked to Dano yesterday.* なる一文章は五語より成れども、強く讀む語次第にて意味上全く五個の異りたる文章となるなり。Iを強く云へば、他人にわらず私がとなり、walkedを強く云へば、他の方法を、取らず歩行して行けり、となる等の如し。

(五) 語勢語調に注意せざるべからず。—エンフアシスの外に語勢の抑揚即ち *Inflection* の必要なるを屢々之あり而して此は英語に於ては日本語に於けると異なる場合少からず。たとへば、直接疑問の時に語尾にて語勢を揚ぐるが如し、悲しむ時、怒る時、喜ぶ時、各々自然の音調あり。此等の變化に注意し、能く著者の意味を尋ねて讀まされば滑稽を演じ爲めに笑を招くに了るべし。

要するに、讀方は意味と伴ふと必要なり。而して斯く爲すには先づ讀む事の意味が明瞭なると必要なり。次ぎに能く此の意味を音調語勢にて寫し出たすと必要なり。故に發音アクセント等は讀方の基礎として必要なるが、會話文典作文等は讀む文を已れのものと思はしむるに必要

なり。吾人が音讀すると默讀するに論なく、苟も通讀して明瞭に意味を了解し得んには、若し音讀せば能く前に述べたるを爲し得るものならざれば能はず。又譯讀は始めには意味を解するに必要なれども、後には譯しては返つて意味の透明を缺くと感ずるに至るものなり。此處に至つて初めて英語教育の目的は達せらるゝなり。今日の如く譯讀にのみ重きを置くは、方法と目的とを見違へたるものにはあらざる乎。故に予は讀方の今少しく重んぜられんとを切望して止まざるなり。少くとも今日の二三倍の時間は之が爲めに費されざるべからず。一般に譯讀よりも讀方が重んぜらるゝに至らざるべからず。譯讀は過渡的にして讀方が究極的なることが明瞭にならざるべからず。少くとも譯讀せず單に書物を讀下して了解すてふ事が本躰とならざるべからず。而して今日の譯讀は此の目的に至る自然の階段に過ぎざる事が、一般に認識せらるゝを要す。

(五) 譯讀

譯讀に就いては累ば上に述べたるが如く、此は決して英書を讀むべき

正當なる方法にわらず、英語が單に讀下して其意味の明白に了解し得らるゝに至りてしめて、英語を學ぶ目的即ち譯讀其者の目的は達せられたりと云ふべし。そは譯讀は過渡的のもの、方便的のものに過ぎざればなり、即ち學生をして見下したるのみにて意味の明白に分るに至らしむる階段に過ぎざればなり。故に予は譯讀を以て今日世人の多數が重んずる如く重んずべきものと思はず、又譯讀を教ゆる今日の方法に至當なりと考ふる能はず。吾人は漸々譯讀と譯讀とを接近せしめて遂に學生をして譯讀の必要を感ぜざらしむるに至らざるべからず。是れ譯讀の當然たる價值にして此の以上を望まば譯讀は遂に僭越の罪を免れざるべし。

譯讀の方便的にして過渡的になると斯くの如し。然れども初めに於ては譯讀は必ず教へられざるべからず。そは譯讀によらずして遂に通讀の境界に達すると能はざればなり。譯讀既に正當にして必要なるものならんか、譯讀は理想的に教へられざるべからず、又統一的に教へられざるべからず。

譯讀を理想的に教ゆるとは、譯讀の理想的方法を講究し之に従つて教ゆるの謂ひなり。譯讀の理想的方法とは、可成英文中の語を活かして而も譯文が日本語たるを妨げざるを云ふ。然るに今日の處、譯讀には一方に直譯なる極端あれば、又他の一方には意譯なる極端あり。直譯の譯にあらざるとは既に先輩の定説あり。然るに此の直譯が今日も尙一般に行はるゝは實に長大息の至りなるが併し、又能く考ふる時は直譯にも全く意味なきにあらず。即ち吾人は外國語を譯讀するに當りては、心理上自然に原文の一言一文を悉く活かして譯讀せざれば満足するとは能はざる傾向を有するものにして、今日に尙直譯の流行するは他に種々なる理由あるべし。雖も幾分かは人心の此の傾向に困るものにはあらざるべきか。此れ實に吾人が譯讀の理想的方法を定むるに於て注意すべき點なり。さらば問題は、如何なる程度迄英文中の語を活かすべきやなり。曰く譯讀を速記して英語を知らざる日本人が明白に了解し得て、條件さへ満足され得んには、此の範圍に於て可成原語を殺さず活かして譯するを譯讀の上手とす。吾人は可成名詞を名詞に、動詞を動詞

に副詞を副詞に譯讀すべく、又語の數にも余り増減なきを期すべきなり。是れ所謂語を活かすなり。然れども常に斯くすれば所謂直譯の句調となりて一般の日本人に明白ならざる日本語。否、無意味の言語となり。了ると少からず、故に常に注意すべきは譯文が言文一致の日本語となる居るべきとなり。是れ決して容易の事にあらず。故に自然の傾向は反對即ち所謂意譯に流れて、何の語が何の意なるや學ぶ者に取て明白ならず、爲めに徒らに全躰の意味を暗記するに止まると少からず。直譯意味は譯讀の兩極端にして共に弊害少からず。故に予は中庸を守り、直譯の短處を去りて長所を取り、又意譯の短處を去りて長處を取りたるものを以て理想的譯讀法なりと信す。即ち可成語を活かして而かも日本語たるを失せざる譯讀法なり。今日の直譯は日本語にあらず、否、日本語を破壊するものにして、國語漢文と矛盾するを常とす、何んぞ中學教育に統一なきの甚だしきや。

又譯讀を統一的に教ゆるとは、譯讀を教ゆる時常に之と共に發音文典會話等他の條目を併せ教ゆるの謂ひなり。今日の一般の傾向は譯讀最も重んぜられて、他の條目は凡て輕んぜらるゝに在り。又今日の教師の多數は單に譯讀の教師にして發音、讀方、文法、作文等に通せざるもの。若しくは通ずるも調和的に教ゆるると知らざるものなり。故に此等の條目の間には統一なく、學生は凡てをバラバラ々に學びバラバラ々に記憶せざるべからざるが爲めに徒らに苦しむなり。之に反して若し此等を統一的に教へんか、此等の條目中の甲は乙を助け、乙は丙を助けて了解にも又記憶にも共に非常なる便宜を興ふるものなり。殊に異りたる教師が此等の條目を別々に教ゆる場合に於ては、重複矛盾の外に所謂トンチンカンなると多くして學生の蒙むる損害は實に莫大なりとす。之に反して若し一人の教師が此等凡ての條目を教ゆるか、若しくは教師と教師との間に打合せあり連絡あらんには、英語の進歩は實に著しかるべく、其利益は單に譯讀に止まらず、讀方に於ても文法に於ても作文に於ても、不思議なる程の好影響あるべし。譯讀をして譯讀の目的を達せしめんには、必ずや發音讀方文法作文會話等と伴はしめざるべからず。否、此等を最も有益有功に教ゆるは譯讀の時に於てするに如くはなく、

又譯讀をして最も有益有功ならしめんには此等と共に教ゆるに若くはなし。同一文章につき譯讀を教へ讀方を教へ發音を教へ文法を教へ作文を教へ會話を教ゆれば幾度か此の文章を反覆するが故に意味の了解愈々明瞭なるべし。語句を記憶するとも大に容易なるべし。又自然に英文の美妙に感染し趣味を自得するに至るべし。斯くする時は譯讀としての進歩は餘り速かならざるも一文を解し一章を讀み又一冊を了れば之と同種の文章又同程度の書物をば餘程自由に繙き得るが故に其實進歩は甚だ速なりと云はざるべからず。そは一文を讀み一冊を讀むは同種の凡ての文章同程度の凡ての書物を讀むを意味すればなり。新らしき文章又は書物に對し常に學ばぬから讀めぬとの感を抱かしむるが如き譯讀法は決して完全なりとは云ふべからず。予が所謂統一的譯讀法は斯る障害を除去せしめんと欲するものなり。

今日に於て行はれつゝある譯讀法が如何に不完全なるや。又教授上如何に改良すべきや。に就いては云ふべき點少からず。兎ても今之を悉く擧ぐるの違なし。試みに思ひ出づる儘二三を擧げん。

- (一) 書物に假名を付けるは單語の譯を書き附くるとを禁すべきこと。書物に假名を付け置くも又單語の意味を書き付け置くも共に甚だ便利なるには相違あらざれども此等は甚だ有害なり。斯くする時は云はゞ書物或は雜記帳が記憶して肝心なる本人は記憶するとなし。云はゞ記憶せぬ爲めに書き付くるなり。斯くするは其の書物を復習するには便利ならん。然れども英語を學ぶ目的は此の書物のみを讀むが爲めにあらず。凡ての書物を讀むが目的なり。此の目的に有害なる以上は如何に苦しきも書き付けは一切嚴禁せざるべからず。今苦しむは後大に樂ならんが爲めなり。故に句とか熟語とか特別即ち例外の場合の外は決して書き付けを許すべからず。殊に書物中には決して爲さしむべからず。故に予の主義に従へば書物中に日本語にて譯讀或は説明を與へあるは少くとも中學程度の學校に於ては一切嚴禁すべきものとす。是れ學生に親切なるに似て、其實最も不親切なるものなればなり。
- (二) 譯讀の際に於て固有名詞其他の英語を用ゆる時は必ず正當に發

音すべきと。一 元來發音の正しからざる者は云ふ迄もなく發音の正しき者にて、日本語で云ふ時は日本風に發音するを常とす。併し此は譯讀の教師が嚴禁すべきとなり。そは折角讀方の時に直したる學生の發音は、譯讀の際再び破壞せらるればなり。學生をば力めて唯一の正則なる發音に感染せしめざるべからず。たとへば讀方の時 *Japan* と讀ませながら、譯讀の時には *ジャッパン* と云ひ又 *Napoleon* と讀ませながら、*ナポレオン* と云へば、一方で直して一方で壞はす道理ならずや。斯くせば學生は讀方の時にも自ら變則的發音に陥るべし。是れ小事に似て決して小事ならず。

(三) 代名詞をば極めて明白なる場合の外必ず名詞に換へて譯讀せしむべきと。一 英語が日本語に異なる點の一は代名詞を用ゆるとの多きとなり。而して代名詞の指す名詞は常に注意するにあらずんば屢々漠然として孰れなりや又何れなりや明白ならざるとあり。故に英語の代名詞を悉く正確に名詞に換へて譯するは随分困難の事なり。殊に關係代名詞に於て然りとす。されども此等を明白に區

別して適當なる名詞に換へて讀み得るは、慥に腦髓の明瞭なる證據にして、而かも譯讀上の一大要訣なりと信ず。曖昧を避けんと欲するもの、必ず心得べきとなりとす。

(四) 同意語の異同辨に注意して適切なる譯語を與ふると。一 是れ亦決して容易の事にあらず。然れども甚だ大切なり。たとへば *Some* と *Any* とは共に「或る」と譯するが通例なるが、此は甚しき間違を生ずるものなり。 *Something* と *anything* の如きは之が爲め常に取り違へられて、文意の不明瞭を來たしつゝあるなり。二者は或る點に於ては似たる處あれども、又殆んど反對の意味を有する場合あるなり。其 *Do* と *make*, *come* と *go*, *see* と *look* 等の如き、殊に日本人として區別の困難を感じるにあらずや。教師たらんものは豫じめ此等の異同と困難なる所以とを熟知して學生を助けざるべからず。

(五) 熟語及句の有り次第適當なる譯語を教へ且つ暗記せしむべきと。一 熟語なり句なり、之を組織する單語の別々の意味にては明白ならざるもの多し。教師たらんものは先づ自ら之を知らざるべから

す、且つ適當に教へざるべからず。たとへば數個の語が集りて働詞  
或は前置詞等の用を爲す場合の如きは、必ず注意すべし。 *Strike at*  
の如き *take hold of* の如き *in front of* の如き皆然り、又句の前の *ing* を  
何時でも處でと譯し、同じく句の前の *s* を何時でも迄或は「へく」  
と譯するが如きは、不都合の極にして、嚴重なる匡正を爲すにあら  
ずんば、遂に打ち勝ち難き惡習なり。

此の外にも云ふべきとは多けれども、今之を枚擧するの違なし。或は多  
少次ぎの文法の條にて述ぶる機會あるべし。

唯一つ譯讀并びに讀方に關して茲に附記せざるべからざるは、讀本中  
に挿入しある英詩を我學生に教ゆるの可否如何なり。此の問題に就い  
ては双方議論のあるとなれども、予は今茲に之を詳論するの違なし。只  
予は讀本中の英詩は決して之を畧すべからず、必ず譯讀すべく又讀方  
を教ゆべしと云はんとす、反對者の議論は要するに英詩の全躰に讀み  
難く解し難きと、語句の順序が不規則なる爲め學生が散文を讀むに妨  
害となるとの二點に歸着すべし。如何にも韻文に於ける語句の順序は

散文に比して不規則なり。然れども不規則の中にも自ら一定の規則あ  
りて、始めより詩は此の如きものなりとして教ゆれば、學生は直ちに之  
を慣れて少しも痛痒を感ぜざるに至ること、予が多年の實驗に徴して  
明かなり。従つて韻文を讀むは決して散文を讀むの妨害となるものに  
あらず。要は始めより畧せずして秩序的に英詩を讀ましむるに在り。斯  
くせば英詩は決して左程六つかしきものにあらず。只易き詩より始め  
ざる者が頓に難き詩を讀まんとするが故に、絶望的に感ずるなり。殊に  
英文學に於ては韻文は精なり萃なり。有名なる文學的著作は殆んど皆  
韻文ならざるはなし。之を思想の上より云ふも、又音調の上より云ふも  
英詩を讀まざるものは英文の美を知らざるものなり。苟も英書を讀み  
英文の趣味を味ふを目的とする人々は、必ず英詩を讀まざるべからず。  
故に讀本中の英詩は譯讀の材料として用ゐらるべきのみならず、必ず  
讀方若しくは暗誦の材料として用ゐらるべきものなりとす。讀本を讀  
みて詩を讀まざるは恰かも汁を吸ふて肉を食はざるが如し。實に遺憾  
の限りならずや。

(六) 文法

中學程度の英語に於て、文法は如何なる程度迄又如何なる方法によりて教ゆべきやは、困難なると同時に大切なる問題なり。然り、如何程又如何に教ゆべきかは問題なり。苟も英語の教師たらんものは、英語の文法に就いては十分知らざるべからず、即ち云ひ換ゆれば、教へ得る丈けに知らざるべからず。是れ教師としての必要なる資格なり。然れども知る處は決して必ずしも悉く教ゆべき處にあらず。然らば如何なる程度迄教ゆべき乎と云ふに、予を以て見れば、中學に於て廣く一般の中學生に教ゆる文法は、彼等が讀む處の書物の意味を明確に了解するに必要な程度に於て教ゆべきものなりとす。中學に於ける英語科の理想をユニオン第四讀本ナショナル第五讀本の程度なりとすれば、此等の意味を了解するに必要な程度に於て、文法の智識は満足なりと云ふべし。既に意味の了解と云ふ以上は意味さへ明瞭ならば、其上別に文法として文法を教ゆるの必要は之を認めざるなり。斯く程度問題が落着くるとせば、文法を教ゆる方法も亦自ら發見に困難ならざるべし。曰く譯

讀の書物を離れて別に文法として文法を教ゆるの必要なきが故に、中學に於ては別に文法の教科書を用ゆるの必要なし。唯教師が文法上の術語を時から時に必要に應じ、又可成順序を定めて教ゆれば、それにて足れり。若し強ひて教科書を用ゆとなれば、第一第二第三の三年間に於てすべからず、第四第五の二年間に於て、單に記憶すべき理論の極めて少く、實際練習すべき材料に富める極めて簡易なる文法書を用ゆべし。文法書によりて文法を學ばんとする者の困難は、文法の諸規則中肝要なるもの即ち適用すべき場合の頻繁なるものと、比較的肝要ならざるもの即ち規則としては面白きも餘り役に立たざるものとの區別の爲し難きに在り。従つて文法書を用ゆる通弊は、文法の智識が徒らに記憶的となりて學生は云はゞ玉石無差別に凡ての規則を暗記するに至るに在り。而して此等の多くの規則を長く記憶せんは到底不可能の事なるが故に、學生は漸々此等を忘却するに至る。是れ實に止むを得ざるとなり。斯くして忘却せらるゝは單に元來肝要ならざる規則のみならず、肝要なる規則も亦共に忘却せらるゝに至る。是れ覺ゆる時に無差別

的に覺るたるが故に、忘るゝ時にも亦無差別的に忘るゝものならん、苟くも文法を有益に教へんと欲せば諸種の規則を必要の度に應じて差法的に又實用的に教へざるべからず。

予の経験によれば文法書によりて學びたる又教へたる文法は單に文法の爲めの文法となりて、死物となり易く、實際に活きて働くと少したどへば神田乃武氏著の高等文典の如きは甚だ便利なる教科書なるも、之を高等師範學校の學生に教ゆるに、單に規則の記憶となり易く實際記憶され活きて働くと云ふと難し。況んや中學に於てをや、故に中學の文法教科書は極めて簡易のものにして可成譯讀の書物と密接の關係あるものならんを要す。若し斯くの如き文法書無くんば寧ろ全く教科書を用ゐざるに如かずとは、是れ予が持論なり。それよりも實際譯讀の書物につき實物教授的に教師が自由に文法を教ゆべきなり。文法は學生が歸納的に自ら規則を發見し得る様に教へざるべからず。固より教師は能く舵を取りて演繹的に規則を教へざるべからざるも可成學生には自然に歸納して發見したるが如く感せしむるを最も有功なりと

す。斯くするには教師たるものは餘程文法に通曉せざるべからず、又教授法に熟練せざるべからず。此くの如き教師を得んは決して容易の事にあらざるべし。故に今日の處に於ては種々の便法を用ゆるの必要あらん。然れども歩一步理想に向つて進捗せざるべからず。然らずんば遂に改善の期あらざらん。

文法の教授は一法に於ては譯讀と併行せざるべからず、又他の一方に於ては必ず作文會話等と調和せざるべからず。然らずんば文法は遂に畫餅たるに了らんのみ。若し能く讀め又能く書けんには、文法を文法として知らずとも何の不都合あらんや。文法學者とならん者又英語の教師たらん者は暫く措き普通の中學生に取りては文法を學ぶは正當に讀み正當に書かんが爲めのみ。文法の規則を知るも讀み書きの出來ざるは、文法の理屈を知らずして讀み書きの出來るに劣ると實に萬々ならずや。要するに中學の文法は方便にして目的にあらざる故に目的さへ達せらるれば方便の如何は別に問ふに及ばざるなり。只目的を達するに於て必要なる限り方便の智識を必要とするのみ。文法は實際的に教



へても理論的になり易きものなり。況んや初めより理論的に教ゆるに於てをや。又文法を實際的に教ゆるに當りても、新らしき實例を擧げんよりは、寧ろ可成譯讀中の實例につきて教ゆるを宜しとす。是れ優りて統一的なればなり。又直ちに之を作文會話に活用するを宜しとす。是れ又統一的なればなり。

第一年より第五年に至る迄の五年間に於て、文法を教ゆる機會は、譯讀に用ゆる書物に於て充分に發見し得らるゝなり。只教師が此の機會を利用し得ると得ざるとの差あるのみ。簡より繁に、易より難に、順を逐ふて進めば、文法は決して絶望的のものにあらず。否、文法を教ゆるは之が爲めに面白くなるものなり。そは文法は常に作文會話と伴れて、自己の思想を發表するの文法と愉快とを興ふればなり。さらば教師は如何なる機會に於て文法を教ゆべきや、又如何に歸納法と演譯法とを兼用すべきや。今茲に之を詳述するの遑なし。試みに數個の例を擧げて大體の方針を示さん。

(一)常に名詞代名詞の單複、男女格等に注意せしむると。―日本語に於

て名詞、代名詞に此等の變化なき爲めに、我學生は初めに於て嚴重なる練習を要す。殊に格に至りては能く「テニヲハ」に注意して亂雜ならしめざるを要す。たとへば主格は可成「ハ」或は「ガ」又目的格は「ヲ」と打假名を付けしむるが如し。

(二)働詞ある毎に數時態等に注意せしめ且つ常に其の重要部分を云はしむると。―此等の中態即ち *Voice* の用法は日本語と異り、我の受動は彼の施動、彼の受動は我の施動にて現はす場合少からず。故に學生をして常に此の變化に熟練ならしむるを要す。且つ一働詞につき常に其の重要部分即ち *Principal parts* を云はしむるは、一語の爲めに三語を覺ゆると、現在過去等の變形を知ると、受働態の畧文を解すると等多くの利益あり。

(三)助働詞 *Do* のある毎に其の三用を問ひ試むると。―先づ機會あり次第、學生をして *Does go* = *goes*, *Does go* = *go*, *Did go* = *went* なることを知らしむべし。而して次に助働詞を有する形を用ゆべき三つの場合、即ち(一)疑問、(二)否定、(三)力言の三者を記憶せしむべし。而して常に

新らしき場合のあり次第幾度となく問ひ試み、且つ屢々實例によりて之を適用せしむべし。

(四)常に疑問に二種ありて、間接疑問の時は所謂疑問の言葉が第一位に来ることを悟らしむべきこと。Yes或はNoにて答ふべきは直接疑問なると、又此時は最後に音聲を揚ぐべきことを悟らしむるは云ふ迄もなく、疑問の言葉ある間接疑問に於ては文章が「何」「誰」「何處」「如何にして」等の言葉を以て始まること、此種の疑問に限り最後に於て聲を上げざることを悟らしめ且つ實用せしむるは學生の勞力の節儉上有功なるとなり。

(五)答の本文が否定的なる時は必ずNoと云ひて決してYesと云はざることを練習せしむると、YesとNoとの用法は日本人の甚だ間違へ易きものなるが、此等を云ふ前に先づ學生をして答の本文に否定の言葉若しくは意味の有無如何を考へしめ、之れ無くんば常にYesを用ゆべく、之れ有らばNoを用しむべし。是れ甚だ簡便なる規則なりとす。たとへば君は明日學校へ行かぬかと問はれ

たる時、行かぬならば、日本語にては「ハイ、行きませぬ」と云へど、英語にては「イヤ、行きませぬ」と云ふ。如何となれば本文が「行きませぬ」と否定なるが故なり。

(六)冠詞のあり次第常に其用法につき明確なる説明を爲さしむると、冠詞の用法は吾人の最も困難とする處なり。然れども教師が常に注意して冠詞の有り次第、其所に於ける意味を明確に教ゆれば、思ひの外速かに大跡に於て困難を免かれ得るなり。たとへば教師は先づ學生をして不定冠詞に、(一)單に數の「一つ」と、(二)何れでもと、(三)定まつたもの、中の「一つ」と、(四)毎どの四意あることを演繹的に示し置き譯讀の時不定冠詞あり次第、其の場合の用法を考へしむれば、學生は不知不識の間に非常なを難關を通過し得るなり。

(七) All this, such a 等に遭遇せば他の例を擧げ學生をして此種の用法に慣れしむべきこと。たとへば冠詞は形容詞或は形容詞を形容する副詞の前に來るものなりと一般の規則を教ゆる時には、時々例外ありと云ひ置くべし。而して例外に接せば All the boys, Much the

same, Such a book, So good a man, What a good house 等の他の例を擧げて、學生を此種の用法に習熟せしむると肝要なり。

以上は僅かに方針を示さんが爲めの數例のみ。要するに文法を譯讀と共に教へて双方を活かし、以つて作文會話に之を應用するに便ならしむる様に教へざれば、文法は徒らに記憶の長物となりて實際上の利益は皆無なるべし。

(七) 作文

作文を如何に教ゆべきやは困難なる問題なるが、英作文の主意は内容にあらずして形式に在り、即ち既に云はんと欲する思想はありと假定して、其の發表の方法即ち如何に之を英語にて發表すべきやを教ゆるを目的とす。故に英作文、少くとも中學に於て教ゆべき英作文は、此點に於て國語の作文と大に趣きを異にするものとす。故に英作文を教ゆるに於ては、學生をして發表すべき思想の爲めに思慮を勞せしむるは極めて愚なり。それよりも發表の方法に就いて熟練せしむるを要す。是れ實に英作文に關して最も注意すべき點なりとす。

而して思想を發表する方法即ち形式は、凡て他の言語に於けると一般英語に於ても畧ぼ一定し居れば、可成此等のせる形式を順序に従ひ一統的に教ゆるを適當とす。初學者は英文には一定の形式なく悉く別種のものなりと考へ易しと雖も、其實決して然らず。試みに諸種の英書を繙きて文章の形式如何を研究すれば、凡そ一〇〇の形式にて殆んど文章の凡ての組織を網羅し得べし。即ち異りたる一〇〇の形式に通ずれば、如何なる文章と雖も、其の解剖に困難なることなく又之を模倣するを得ざるはなし。そは此等一〇〇の形式を知れば、其他は凡て此等の變形に過ぎずして、云はゞ繁簡長短の差異あるのみされば、中學に於ては此等百種を五年間に教ゆれば事足るなり。云ひ換ゆれば、中學生は第一年より第五年に至る五年間に於て、此等百種の形式に通曉すれば、それにて宜しきなり。故に一年には僅に二十種の形式を覺ゆるに過ぎざる割合なり。然れども此等の二十種は繁簡長短によりて種々様々に變化し得べければ、其實二十種にあらずして百種とも又二百種とも見るを得べし。故に英文を單に煩雜解し難きものと思はざらしめんと欲せば、此等の

大綱によりて英文の組織の大筋に通せしむるを極めて便利なりとす。斯く模範的形式によりて作文を教ゆるもの、是れ予の所謂模範文章法なるものなりとす。

予の模範文章法即ち Model-sentence-system と云ふは、先づ文章の模範を示し置き、學生をして之に模して多くの同種なる文章を作らしむる方法なり。即ち一個の模範文章を基礎とし、單に用語を變じて種々の事を云はしむるものなり。たとへば「There are many boys in this class.」を以て假りに一の模範文章とすれば、之を模範即ち基礎として、學生をして「There are many mountains in Japan.」とか「There are few books in this library.」とか、或は單數に變じて「There is little money in this purse.」とか「There is much water in that well.」など云はしむるが如し。而して一模範に關して少くとも十以上の同種の文章を作らしむべく、又教師は常に多少の變化を利誘して活用に意を注ぐべし。而して此等の模範文章は教師に於て豫じめ順序を一定し引き、學生の學力に應じ短より長に易より難に順を逐ふて進ましむべきものとす。又斯く順々に新らしき模範文章を示すにも、常に譯讀と併行せしめざ

るべからず。即ち譯讀せる處につき適當なる文章を發見し置き、學生をして之を發見し且つ之を模範として同種の多くの文章を作らしむべし。而して場合のあり次第既に學べる模範を反獲せしめて遂に云はゞ此の形式が學生の心に感染して云はゞ其の經緯を形造するに至らしめざるべからず。斯くすれば讀むは書くに伴ひ書くは讀むを助けて譯讀と作文は自ら接近して統一せらるゝに至り、學生は自然に讀む時に書くことを思ふに至り、之が爲めに今日に於ける兩者の間の間隙は自ら填充し得らるべし。斯くして譯讀の進むと共に作文も複雑の度を増し行かば五年の終はりに於ては餘程六つかしく込み入りたる思想を發表し得るに至るべし。

今作文に就いて上に述べたる處及び他の注意すべきことを手短に擧ぐれば左の如し

- (一) 思想の爲め學生を苦しむべからず。—英作文の稽古は如何にして思想を發表するやの方法を教ゆるが目的にして、如何にして思想を組織すべきやを教ゆるものにあらず。故に題を出さずして文を

作らしむるは不都合なり。又題を出すも何を書くのやら分らぬ様なるは出すも餘り利益なし。寧ろ始めより定まりたる大體の思想を興へて之を發表する方に専ら力を用ゐしむべし。

(二) 模範法を用ゐて作文に熟練せしむべし。模範文章は廣く研究して組織を立つべく、又一定の順序を定めて譯讀と共に併行せしむべし。而して、目的は熟練にあり、即ち能く此等の形式に熟達して新らしき場合に應じ必要に際して能く之を活用し得るに在り。

(三) 可成十語以下の短文に習熟せしむべし。日本の文章は句讀法なくして、爲めに文章が節のなきと恰も葱の如くなり易きを弊とす。故に英文を我學生に教ゆるに於ては、殊に注意して此の弊に陥るらざらしむるを要す。斯くするには英文には竹の如く節あるを知らしむべく、又其節は可成短かからしむべし。故に一文章は十語以下なるを練習せしむべし。長文は短文の接續より成るものなれば、短文さへ出来れば長文は作り易きものなれども、短文出来すれば長文は決して望みあるとなし。

(四) 時に新らしき問題を出して如何なる事を如何なる形式にて云ふべきやを研究せしむべし。斯る場合に於て困難は書くべき思想の明白ならざるに在り。故に先づ書くべき事を精密に定めしむべし。思想さへ定まらば書くは餘り六つかしきものにあらず。而して次に此の思想は今迄知り居る單語と模範文章とにて發表し得るや否やを考へしむべし。何とか書かざれば首を斷らるべしと思ひて書けば、何とか書けるものなり。斯くして習慣を得ば作文は餘程容易になるなり。

(五) 作文は凡て調和的に統一的に教ゆべし。一方には譯讀文法と伴ふべきは云ふ迄もなく、又他の一方には必ず會話と並んで教へられざるべからず。斯して始めて文法は有益となり、會話は容易になり、又譯讀は面白くなるなり。此等を調和的ならしめんには教師が一の教科書を用ゐて、凡て此等を統一的に教ゆるを以て最良の方法なりとす。

(八) 會話

會話は如何なる程度のものゝ如何なる方法によりて教ゆべきや。予の考にては中學の英語は文法、作文、會話を目的とすべきものにあらずして、其の理想は平易なる書物を英語の儘にて意味を解しつゝ、讀下し得るに在り。而して文法、作文、會話等は此の理想の爲めに、即ち此の理想を實現するに於て必要なる限りに於て必要なるものとす。多少文法を解し、作文と會話をなし得る者にあらざれば此の理想は實現し得られざるべし。故に予は右の範圍内に於ては文法、作文と、共に會話を重んずるなり。否、會話が今日よりも盛んに教へられんことを望み、且つ其方法について大に研究しつゝあるものなり。

今日中學に於て教へらるゝ會話なるものを見るに、そが發音譯讀、文法等と殆んど何等の關係をも有せざるは勿論、作文其者とも連絡なくして教へられつゝあるが如し。而して其の教授法を見るに、多くは學生をしてたとへば一時間に教師が教へ得る丈け即ち二十なり三十なり、の文章を筆記せしむるに過ぎず。而して請記せしむるにもあらず、勿論練習せしむるにもあらず。只會話教科書の中にあることを教師の口を経て

學生の手帳に移住せしむるのみ。果して斯くして會話は學ぶべきもの、又教ゆべきものなりや。

會話は斯く注入的に多くの文章を筆記したるのみにて學び得らるゝものなりや。語のアクセントにも注意せず、音の抑揚をも知らずして會話は爲し得らるゝものなりや。會話の要は先づ已れが相手の云ふ事を了解するに在り、而して已れの云はんと欲する事を云ひて彼に了解せしむるに在り。而してこれを咄嗟の間に爲すに在り。長く考ふるの違あるにあらず。久しく相手を待たしむべからざるなり。さらば會話に最も大切なるは發音の正確と文意の明白と、應答の迅速に在り。此等を得んには發音、讀方、譯讀、文法、作文等は必ず會話と總合せられざるべからず。且つ會話は應答の迅速を必要とするが故に殊に熟練を要す。而して此の熟練は決して注入により又請記により注入らるゝものにあらず。必ずや實際の練習を要す。多く文章を記憶せんよりも、記憶せる少しの文章を必要に應じて能く活用し得るを貴しとす。文章の請記のみは遂に座敷の水練と等しく實際に其用を爲さざるなり。

會話と云へば人多く此方より云ふことのみと心得居れども、會話は既に文字の示す如く、會して話すものなれば、相手の云ふことが此方に明白ならざるべからず。然らずんば如何で適當なる應答を爲すを得んや。故に會話を教へんには學生をして先づ聞き取りに慣れしめざるべからず。是れ第一點なり。而して次に此方より話す稽古を爲さしめざるべからず。之を爲すには學生をして何とか云はすんば首を斷らるゝてふ心持ちにならしむるを要す。斯くして遠慮なく過失に構はず、ズン々々思ふ事を云はしむるに在り。會話を教ゆる上手下手は、實に學生をして斯く云はしめ得ると否とに在りて存す。

會話の材料は矢張り譯讀の書物を基礎とし、譯讀に伴ひて教ゆるを最も便利とす。従つて會話を教ゆる方法も上に述べたる作文の方法と同一の方法を用ゐ、可成模範的に教ゆべし。譯讀の書物を用ゐて會話を教ゆれば、單に此の事實によりても學生は既に自ら活用實を悟るなり。又模範的に教ゆるが故に、單に請誦にあらすして考へて即ち獨立して云ふの習慣を得るなり。而して會話には可成作文に爲したる事の全躰成

は一部分を用ゆるを最も便利にして、又有功なりとす。故に教師は譯讀の時に文法の時に又作文の時に既に會話の基礎を爲しつゝある譯にて、云はゞ既に其時に會話をも合せて教へつゝあるなり。斯くして日常の事、學校の事、賣買の事等を甘く仕組み置き、譯讀の機會に乗じて秩序的に統一的に教ゆれば、會話は單に會話として面白さのみならず、實に英語全躰に興味を興ふるものとなるなり。

(九) 書取

Writing makes an exact man. と先哲も云へる如く、書くとは人をして萬事に精密ならしむるものなれば、作文を奨励すると共に、書取をも奨励せざるべからず。而して書取を奨励する目的は人をして精密ならしむる外に、ペンとインキに慣れて書くことに自由を得せしむべく、用紙の如き様、頭字の用法、連音の切り様、句讀點の用法等思ひもよらずして而かも肝要なる事實を覚え得るの利益あるべし。故に書取は今よりも優りて盛んに之を課せざるべからず。さらば書取は如何なる書物を如何なる程度に於て課すべきや、曰く書

取は必ず譯讀の書物によりて課せざるべからず。即ち譯讀せる處を順々に書き取らしむべし。而して譯讀せる處は規則として始めより終はり迄悉く用意せしむべし。少しにても書取をせざる處を殘し置かば、學生は書取のある處にのみ注意して他を顧みざるの弊を生せん。されども此は用意せしめたることを悉く實際に書取らしむべしと云ふにはあらず。其内の或る處を選んで書取らしむれば足るなり。只用意は全身に爲さしめざるべからず。是れ單語を覺ゆるに於て、又譯讀其他を複習せしむるに於て、大に利益あればなり。而して書取を爲さしむる程度は凡そ一週間に一度位にて事足るべし。そは予が上來述べ來りたる方法によりて英語を教ゆる時は、譯讀は到底一時間に一頁を教ゆること難く、從つて書取は一週一度にても僅かに四五頁を過ぎざればなり。而して此の四五頁は、既に屢々讀方に於て、譯讀に於て、文法に於て、作文に於て、會話に於て、反覆したる處なるが故に、之が用意を爲すは學生に於て決して困難を感ずべき程にはあらざるべし。書取を嚴重に又一様に行ふは云はゞ今迄種々にして學び來られる處を總合して仕上げをする

に似たり。故に此は學生に取りても愉快なるべきものにして、且つ聞き取りの爲には與りて大に益あるなり。

試みに今日に於ける書取の實際を見るに、教師は常に何を書取らしむべきかに困却するもの、如く、從つて書取を實行せざるもの多し。又之を實行するも譯讀に關係なきものを書取らしむるもの多きが故に、殆んど書取には意味なく、教師其人も何の爲めに書取を爲さしむるやを解せざるに似たり。何ぞ英語教授の統一的ならざるや。書取をして有益ならしむるには、之を統一的ならしめざるべからず。又教師は學生の書取を丁寧にして學生をして凡ての誤謬に注意せしめ、且つ評點を付して學生の成績を定むる材料と爲さるべからず。予の經驗によれば英語に於ける學生の學力を一事によりて試験せんには、書取に加くものなし。書取は實に其人の學力を示すのみならず、云はゞ其人の性格如何をも合せて知らしむるものなれば、學生に於ても大に注意すべき件なりとす。

今試みに書取に就いて殊に注意すべき點、否、書取によりて最も容易に





めざるべからず、且つ一度一定の手本を習ふたる以上は、以後文字を書く凡ての場合に於て學びし通り正しく丁寧に書かしめざるべからず。習字の時間に於ては正しく丁寧に書くも、雜記帳に或は書取帳に書く時には、疎にして亂なる文字を書かしめば、習字の目的は何の爲めぞ。是れ教師たらんもの、注意すべきことならずや。

さらば習字は如何なる字跡の手本を用ゆべきや。予は始めはスペンシーリアン、スタイルを適當なりと思ひしが、學生をして直立跡を試みしむるに至りて、大に「直立跡」のスペンシーリアン跡に優りて種々の利益あるを發見し、今は前説を棄て、直立跡即ち *Upright style* を贊成するものなり。予がスペンシーリアン跡を好みしは、字跡の美麗なるに因れり。而して今直立跡を取るは其の科學的なるに基づく、直立跡の科學的なるは、(一)は其の一目瞭然として読み易きに因る。(二)は何人にも習ひ易く書き易きに因る。而して(三)は之を書くに紙をも又身跡をも曲げずして眞直ぐに書き得るに因る。是に於て乎、今日は英米諸國に於ては一般に「直立跡」を用ゆるの傾向あり。予試みに學生に此の字跡を學ばしめしに、

平常極めて字の下手にして亂雜なる學生が、容易に正確にして明白なる字を書き得る事を發見せり。故に予は此の字跡の一般に行はれんとを望む。若し人あり此の字跡の如何なるものなるやを知らんと欲せば、フォック、ワグナル會社出版のスタンダード大字典の附録、若しくは最近出版のナショナル讀本の一二三卷の中に就いて見るべし。

予は斯くの如く中學教育に於ける英語の理想と其の教授法とに關係して有する意見の大要を述べたり。固より此の他にも云ふべきと少からず、然れども以上述ぶる處によりて予の意見の概要は畧ぼ明瞭なるべしと信ず。要するに予は英語の統一的教授法の必要にして急務なる所以を唱道するものなり。(一)發音、(二)綴字、(三)アクセント、(四)讀方、(五)譯讀、(六)文法、(七)作文、(八)會話、(九)書取、(十)習字等を、凡て調和的に系統的に教ゆべきとを主張するものなり。今日の英語は實に亂雜なり、不規則なり、不統一なり。之が爲めに十餘萬の學生は無益に時間と勞力とを浪費しつゝ、あるなり。是れ實に個人の損害にして又國家の耻辱にあらずや。己れに子弟あるもの、中には僅かに一二人の爲めのみにも、正當なる方法の必

要を認め且つ之を發見せんと盡力する者あり。況んや身教育の責に任じ子弟に英語を教育する者に取りては、英語の合理的統一的教授法の發見は、須らく専心專意之が爲めに研究し之が爲めに實驗せざるべからざるものとす。予不肖と雖も多年中學程度の英語教育に従事し、聊か悟る處なきにあらず。且つ此頃殊に思ふ處を實驗に徹し愈々確信の鞏固なるを覺え、遂に自ら禁する能はず。信ずる處を公にして大方の教を乞はんと欲するに至れり。

人或は云はん。汝が言や良し。然れども汝が云ふ處は單に理想にして實際に縁遠ければ、遂に何の貢獻する處もあらざるべし。汝は如何にして汝の理想を今日に實現せんとするか。今日は凡ての科目に於て教員の不足なる時代なり、殊に英語に於て然り。餓者食を選ばず。何ぞ教師の良否を問ふの違わらんやと。或る人の言真に然り。予と雖も能く今日に於て英語教員の不足なるを知り又予の云ふ處が理想的なるを知る。然れども予は又同時に相當の方法を設け大に之が爲めに力を盡さば、予の理想を、少くとも其幾分を實現せんは決して望みなきとにあらざるを

信ず。乞ふ少しく此等の實際的方法につきて予の今日迄考へたる處を云はしめよ。

(一) 中等教育に於ける英語の理想的教科書を編纂すると、日本人が英語を學ぶには日本人に特種の困難あると前に云へるが如し。故に我中學にて用ゆべき教科書は此の需用に應じたる所謂醫療的のものならざるべからず。外國のものを其儘に輸入したるは遂に圓柄方盤の歎あるを免れず。而して此の醫療的教科書を編纂するには少くとも三つの方法あるべし。第一の方法は一冊にして能く凡ての條目を統一的に教へ得るものとす。第二は條目の都合により冊を分くるも、凡て並進的のものとする。第三は在來の讀本中より一種を選び、之に別冊として教師用の理想的なる教授法を附すると、是れなり。いづれにしても此種の教科書の編纂は決して容易の事にあらざるべし。然れども影響の如何に洪大なるやを思へば、こは決して忽にすべきとにあらず。

(二) 言語教授に關する泰西諸國の斬新なる方法を研究すると、言語の教授法に關しては、今日は泰西の學者中專攻の人々少からず。之が爲め

著書を公にし、或は學校を建て、新法を實驗するものあり、オルレンド  
 ルフの如き、ベルリッの如き、グーアンの如き、皆然り。此等の方法を或は  
 間接に著書により、或は直接に人を派して研究せしむるは、實に今日の  
 急務ならずや、且つ殊に日本人に取りて大切なるは、支那、印度、埃及等他  
 國人に對して英語が如何に教育せられつゝあるやを研究するに  
 して、是れ尤も參考の價值あるべし。須らく人を派して之が研究に従事せ  
 しむべし。教科書の編纂に於ても其の利益甚だ大なるべし。

(三) 一校の英語を統一せしめんが爲め打合せ會を設くべきと。一人の  
 教師は一週廿八時以上の英語を教へ得べからず、故にたとへ毎年級一  
 組づゝの中學に於ても、一人にて凡ての級を教ゆる能はず。況んや毎年  
 級に三組四組を有する中學に於ては、英語教師のみにて五、六人以上  
 に及ぶものあり。而して此等の教師は種々の學校に於て色々の英語を  
 學びし者なれば、到底統一を望むべからず。斯く教師の能力の長短と時  
 間の配合とにより、到底一教師が一組の英語を何も乎も受持つと能は  
 ざるべければ、自然彼我の間に様々なる衝突と不都合とを免れざるべ

し。是に於て乎、英語教師間の打合せ會の必要は生ずるなり。斯く相會し  
 て互に匡正し互に切磋して、發音譯讀會話等凡ての連絡を計れば一方  
 には教師間に於て互に矛盾するを恐るゝ必要なく、又生徒は統一的に  
 教へらるゝが故に、等しく進歩し得べけん。予は此種の打合せ會が凡て  
 の中學否凡ての學校に行はれんとを望む。而して此は單に英語に於て  
 のみならず、苟も一科の教師が三人以上もありて打合せの利益ある場  
 合に於ては一般に實行されんとを望む。否、予は寧ろ文部省が之を命令  
 せんことを望むに躊躇せず。

(四) 諸學校の英語を統一せしめん爲め英語専門の視學官を置かんこと。  
 一校の統一は上の方法によりて得るゝとして、さて中學と中學との連  
 絡統一は如何にして之を爲すべきや。今日の處に於ては殆んど何の方  
 法もあるとなし。故に予はたとへば我國全躰を五區なり十區なりに分  
 割して各區に一名の英語専門の視學官を置き常に區内の諸校を巡視  
 して英語教育の統一を計るは目下の急務なるべしと思惟す。此の視學  
 官は校長主席等と協力して各校の英語の統一を計り諸校間を往來し

て優劣長短を批評して、英語教師を且つ獎勵し且つ誘導せば著しき利益あるべきは蓋し火を視るよりも明白なり而して此等の視學官も亦時に會合して互に打合せを爲さば、我國の英語教育は最も近き將來に於て必ず一新面目を呈するに至らん。

(五) 英語教員傳習所を設け就職教員をして交替英語を講習せしむべきと。— 文部省は夏季講習會を設けて英語教員に講習をなさしむ。是れ實に喜ぶべきとなりと雖も此は單に一年一回にして、人數にも限りあり時日も僅かに二三週間に過ぎざれば全國の中學校、師範學校及び高等女學校の英語教員一千有余人に取りては、僅かに其の何分一を收容し得るに過ぎず。故に予は寧ろ文部省が東京に英語教員傳習所を設立せんとを望む。而してたとへば一時の傳習生を五十名とし又傳習期を二ヶ月位とし、凡ての就職英語教員をして交替傳習せしむべし。是れ随分多くの費用を要するに相違なし、然れども現に教職に在る者は學生と異り英語の教授に就き實際上痛痒を感ずると多く且つ切なるが故に、二ヶ月間の傳習は彼等の多數をして大に悟る處得る處あらしむべし。

教師に傳習するは未だ教育の經驗なき學生に教ゆると異り、二ヶ月を費さば、彼等をして英語を面白く教へ得るに至らしむるを得べしと信ず。新らしく教師を造るは長日月を要すれば、これによりて改新を計らんは到底急には望み難し。之を既に教員たるものに施さば、勞少くして功は必ず大ならん。

(六) 英語教育統一の爲め有資格者の學力を等一ならしむべきと。— 今日の處に於ては英語教員の免狀を得る重なる途三つあり。曰く檢定試験出、曰く高等師範出、曰く特許私立學校出、是れなり而して、此等三者の間には殆んど何の統一も、あるとなし。故に實際の學力と教授法に於ては三出の間實に大なる差異ありとす。中にも檢定出と高師出との兩者は比較的相近しと云ひ得べきも、特許私立學校出に至つては大に思慮を要するものありと思はる。文部省が此等に向つて教員の資格を特許したるは普通教育の爲め賀すべき事なりと雖も、吾人は文部省が今少しく制裁と監督とを嚴にせんとを望む。同一の免狀を同一の文部省より得る以上は何處より出づるも之を受くる者の實際の資格が大躰

の上に於て餘り甚だしき優劣の無からんは實に至當の事のみ。要するに予は英語試験の今少くく容易ならんことを望み、又特許私立學校の監督の今一層嚴重ならんことを望む。斯くして三者凡てが悉く統一的に英語を教へ得る教員を出だし得るてふ一點に於て一致せんことを望んで止まざるなり。

之を要するに、我國今日の中等教育に於ける英語は決して今日の狀態に於て満足すべきものにあらず、必ずや或る理想に向つて進捗せざるべからず、以上開陳したる處は、予が以つて此の理想と爲す處と之に逸する方法との概畧なり。予は重ねて云ふ、今日我國の英語教育には統一なし。統一なきが爲めに學生の蒙むる損害は實に非常にして若し能く此の無益に浪費せらるゝ時間と能力とを利用し得ば我國の教育と文化は實に著しく進歩し得べけん。而して之を爲すには先づ中學教育に於ける英語の理想を定め、次ぎに英語の統一的教授法を施すの一途あるのみと信ず。然れども如何に名案ありと雖も教師其人を得ずんば遂に畫餅と何の選ぶ處か之あらん困難は實に良教師の得難きに在り夫

れ然り、然りと雖も古來供給あつて需要あるは變則にして需要あつて供給を呼び起すを自然の順序なりとす。豈に失望すべけんや。吾人は英語が單に一種の言語としてのみならず、泰西思想の媒介として我十有餘萬の中學生間に恐るべく慄くべき大勢力あるを認む。此の英語を理想的に教ゆると否とは、豈に吾人が大に關心すべき問題ならずや。吾人は理想的教授法と之を活用する理想的教師の出でざるを怪しみ、又之を出だす方法の盛んに講究せられざるを怪しむ。然れども忘るゝ勿れ東方の曙ならんとするは將に旭日の上らんとする前徴なることを。

136

明治三十五年三月十九日印刷

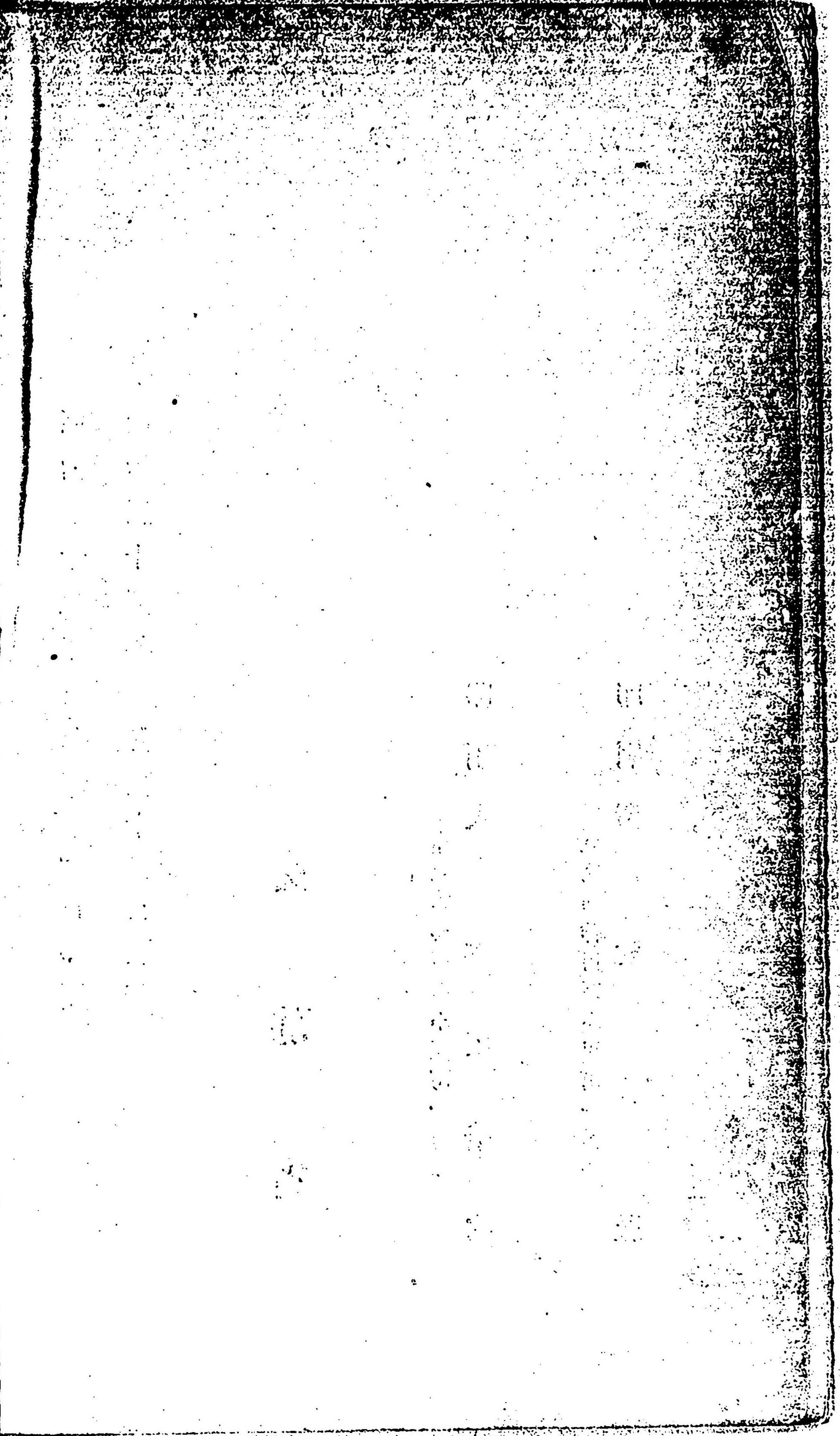
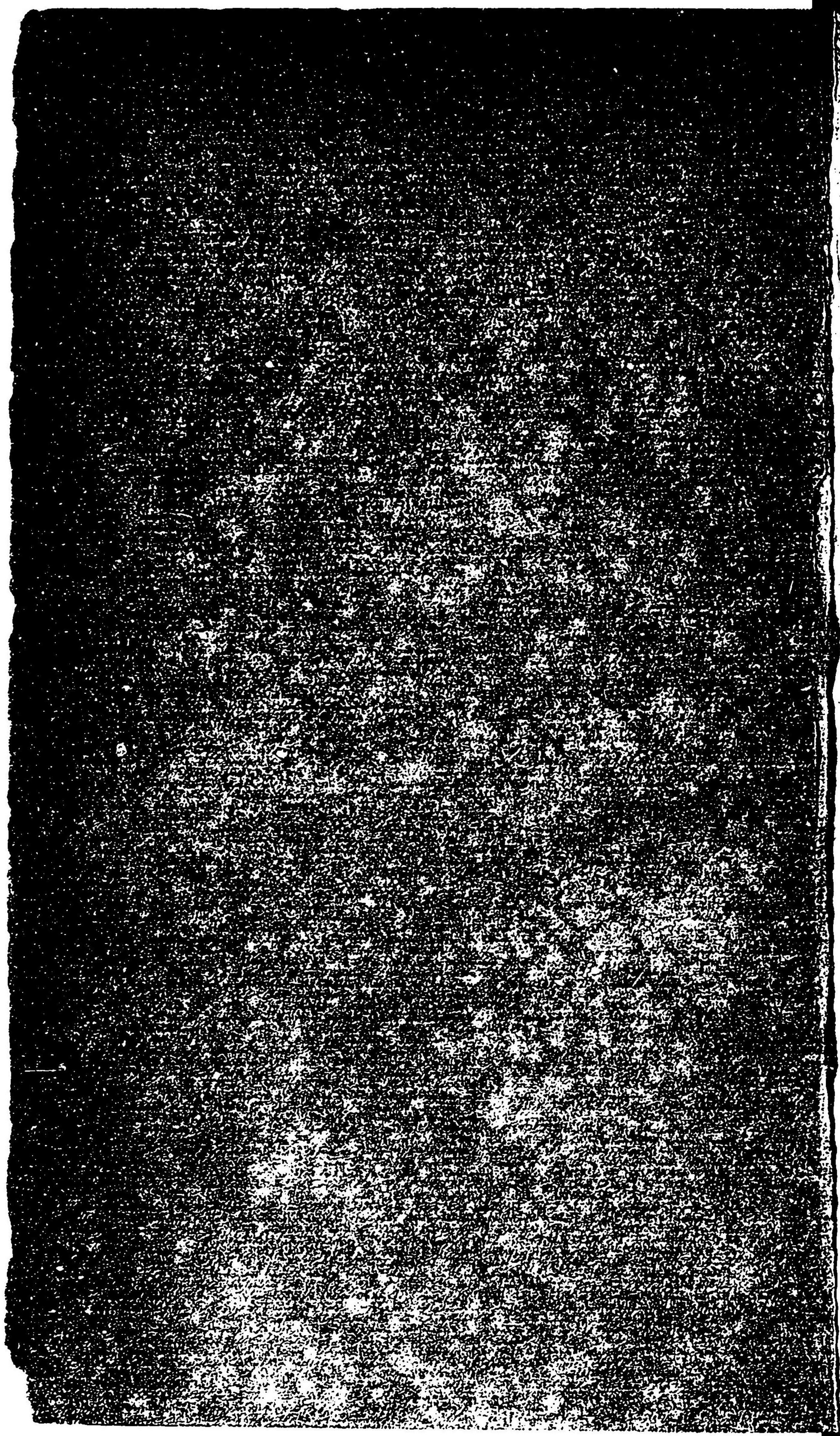
明治三十五年三月二十日發行

(非賣品)

文 部 省

印刷人 東京市神田區小川町一番地 多田榮次

印刷所 東京市神田區小川町一番地 愛善社





263  
II

